

北辰會雜誌

第六號

第四高等學校北辰會

明治二十八年十一月二十一日發行

(非賣品)

北辰會雜誌第六號目次

論說

偽作文書研究の一例(承前)

浦井鍾一郎

カントの性行

得能文

立志(完結)

林安繁

莊子管見(承前)

春秋原在文

史傳

國學復興者としての契沖阿闍梨(第貳號續)

埋木乃翁

文苑

二十五聲の歌

かつら

歌五首

葛の屋主人

全二首

長風子

發句數句

秋竹。樂園。豆男。鳥溪

濱田君千雄碑

村上函峰

送水野遵赴任臺灣序

蓉湖。浦井。信

雨喩。馬説

景齋。迂人

行齋熱童贈答歌詩

葉都子

詩八首

葉都子

雜録

書籍目錄

長連恒

旅の記

葛の屋主人

燈下餘録

春日光千代

雜報

意氣昂る○肉躍り腕鳴る○二兎大に暴威を逞ふす
○其他端艇會の成立等數件

北辰會雜誌第六號

論說

偽作文書研究の一例(前號の續)

教授 浦井鍾一郎

以上譯載せしは、今日歐亞の兩洲に雄飛し、猶機會あらば、支那朝鮮阿弗汗印度土耳其古の方面に打ち出でんとしつゝある、魯西亞帝國建國の祖、彼得大帝の遺言狀にして、帝の子孫に全世界を併呑すべき謀略を教へたる者なりとぞいふなる、讀者之を讀み果して如何の感かある、嗚呼此遺言狀こそは、一時全歐洲の人心を動搖せしめ、各國政治家の心膽をして寒らしめ、續きて數多の歴史家の腦髓を痛めしめし者なれ、かゝる文書を偽作せし者こそいと罪深き業なれ、偕其曲者は誰れなるべきか、天網恢々疎にして漏さず、批評的歴史の明鏡に照らされて、此曲者の顯はれ出でしぞ心地よき。

余輩は此文書に就き研究を始むるに先ち、此文書にいふ所は、果して實際に履行されたるや否を確かめ置くこと極めて必要なり、而して此文書にいふ所は、着々實地に履行され且つ履行されつゝあるなり、例へばポーランドを分領せし如き、裏海黒海の占領といひ、瑞典國よりフィンランド、リボニア州を奪ひたるが如き、動もすれば印度を窺ひ、南下してコンスタンチノールに逼らむとするが如き、又魯國皇子は専ら日耳曼聯邦の中部及び南部の諸公國例せばプロシヤ、ワイマール

ル、ウエルテムベルヒ、バーデン、等の國々より其配を求るが如き、(現今の皇后アレキサンドラ、ヘナドロフナ陛下は獨逸聯邦ヘッセン、ユブルクの出なり)、着々歴史上の事實と符合し、實際に於て魯國政府は、此遺言狀を以て其政略の秘訣とする如く、此文書は魯國政略の虎の巻と稱するも不可なしと覺ゆ、されば、英國、匈牙利、其他の歴史家か、一時は堅く信じて、全く彼得帝の遺言狀なりとなすもの多かりしも、一理ありといふべし、

されど、能く注意して此遺言狀を讀むときは、大に疑團を抱かざるを得ざるべき點あることを發見せむ、其疑問は、實に左の三種にして、是は容易に説明すること能はざるべし、

第一 余は不文にして、能く譯し得ざりしを以て、止むを得ず原文を變更したれども、實をいはい、此文書の原文は、各章ともに、不定法(インフヒニチーブ)を以て始められ、求めよ、勉めよ、といはずして、直譯すれば、求むべく、勉むべくとなり居れり、是は佛蘭文にては理解し得れども、英文若しくは獨逸文にては甚だ奇妙にして、殊に日本文には譯する能はず、故に余は恣に命令的に改められども、其實原文は不定法を以て始まり居ることを記憶し置かれむことを望む、諸君が即ち大なる疑問の一にして、誰人も、彼得大帝が子孫の爲めに遺訓を與へむとして遺言狀を認むるに當りては、必ず莊重なる命令的語調を用ふべしと考ふるならむ、然るに世人の豫想に反し、原文には力なき不定法を用ひたり、不思議といはざるを得むや、而して、最も不可思議に堪へざるは、第十三章に至りて、突然語調を變じて命令的文法を用ひ、第十四章以下に至りては、又々無力の不定法を用ひたり、是に於てか益す不可思議といはざるべからず、

第二 前に述べたる如く、此遺言狀は佛蘭西語もて認めたり、是れ第二の不審なり、勿論レシニア氏の公にせる遺言狀は、抜萃に止まるといへば、氏が世人をして讀み易からしめむため、佛蘭西文に改めたりといはゞ説明も出來べし、然れども如何にせむ、ゲリアーデイ氏の公にしたる者は、其摘要抜萃にあらずして、實にリテライイ、コピー即ち全文の寫なりといへば、此遺言狀は全く佛蘭西文を以て認めたる者にして、ゲリアーデイ氏の反譯にあらずるや明なり、されば彼得大帝が普通人すらも至りて大切と考ふる、特に至りて秘密なる遺言狀を子孫の爲めに認むるに當りて、自國の言語を以てせずして、外國語を用ひたりとは、實に怪むべきの至りなりとす、漢學先生若くは英學先生が、如何ほど其國語に熟達し居るにもせよ、其遺言狀を認むるに當りて、漢文若しくは英文を用ふべしとは到底考へ得られぬ事なり、況んや彼得帝の位置は、我邦の漢學先生若くは英學先生の位置と霄壤の徑庭あるをや、或者説をなして曰く、歐洲諸國中世は羅甸語を以てオフヒンヤル、ラングーシ(公用語)となし、近古は佛蘭西語を以てインタアナシヨナル、ラングーシ(外交語)となし、現今と雖も佛蘭西語は優に列國交際場裡に歡迎せらるゝにあらざや、されば彼得帝が、英語若くは獨逸語を用ひば即ち怪むべしと雖も、何ぞ佛蘭西語を用ひたるを怪まんや、知らずや聖徳太子の憲法は漢文なり、英王シヨンのマグナカルタ(大憲章)は羅甸文なるを、歴史的な文書の外國語を用ひたる其例極めて多しと、此説は一應は其理あれども、要するに是は歐洲の歴史を深く修めざりし人の論にて、魯西亞國は彼得大帝の時に至りて、始めて所謂羅馬日耳曼的社會の中間入をなしたるに止まり、彼得帝の時には、未だ佛蘭西語は魯國に行はれざりき、されば、

よし數百歩を譲りて、彼得大帝が其遺言狀を認むるに當り、ある特種の事情のために、自國の國語を用ふる能はざりしとするも、彼は必ず其熟達せる和蘭語を用ふべかりしなり、何を苦むてか、未熟の佛蘭西語を用ひむや、要するに此遺言狀の佛蘭西文なるこそ怪しき限なれ、

第三 此遺言狀は一言も和蘭國に及べる者なし、彼得大帝の時代は、西曆一千六百八十九年より一千七百二十五年までなり、即ち我元祿年間の事にして、當時和蘭人は盛に貿易に従事し、我平戸邊にも多くの商店を有し、頗る繁昌して歐洲の一バツアたるを失はず、然るに彼得帝か一言をも和蘭國に論及せざるは何事ぞや、まさか彼彼得帝は和蘭國を齒牙に掛けざりしには非るべし、何となれば、今日こそ英國は海王などと威張り居れ、彼得帝の時に當りては、和蘭國こそ海上の帝王なりしか、勿論此國は彼得帝即位に先つこと凡そ三十年、英國と海上の覇權を争ひ、失敗せしと雖も、猶英國と拮抗するに足れり、決して度外視し去る能はざるのみならず、魯國と和蘭とは至りて深密の關係ありて、帝自ら和蘭に遊び、帝の顧問官は和蘭人なり、魯國に在留する外國人の過半は和蘭人なりしなり、然るに帝の一言も和蘭に及ざりしは怪しき限なり、

以上の三點は實に不可思議至極のものなれども、強て辨解せむとすれば、説明の出來ぬ譯にもあらず、此三點を捕へ來りて、直に此遺言狀を偽作なりと斷言する如きは、大早計至極の論にして、法廷ならば證據不充分にて無罪放免なり、但し我邦の史學界にては、此位明白なる證據を捕へ來たれば、得々大早計にも斷案を下し、先人未發の史論なりと吹聴し、滔々たる天下亦た雷同して妙と稱するの風あり、悲むべきなり、見よ西洋歴史家の如何に慎重なるかを、彼等は此等の點に

於ては何等の斷定をも下さず、單に此疑問を胸中に存し置き、轉して他の方向より新なる觀察を施し、終に是種の疑問は如何ほど満足に油然として解釋し去らるゝかを待たむとする也、

輓近歴史研究法(ヒストリーシエ、メトードヅック)の獨逸に發達するや、歴史家は事實を研究するよりも寧ろ其材料を研究して精選するに力を盡すに至れり、稱してシェレン、アナリゼと稱す、次評)といふ、而して其一方の方便として、史料の分拆をなす、之をシェレン、シリチーシ(史料批評)に述ぶる所即ち是なり、要するに二種以上の史料にして同一の事を記する時は、之を比較分拆して、相互の關係を詳にし以て取捨に便にするにあり、假令幾十種の史料あるも其源にして同一なるときは何等の價值をも有する者にあらず、我國史の數多きも千遍一律、特種の性質を具ふる者あらざるは、盡く同一の史料に據りたるためにして、近時重野星野久米諸先生の史論世人を驚かしめたるは新史料に力を用ひたるの結果に外ならず、

余輩は今研究の方法を變し、更に彼得大帝の遺言狀を余輩に紹介したる、グリアーデー及びレシニアの二氏の著に就きて研究せむとす、前述の如く、グリアーデー氏は、一千八百三十六年出版の同氏著ナイト、ヲフ、エオン傳及び同じき七十七年出版ナイト、ヲフ、エオン夫人傳に於て公にし、レシニア氏は一千八百二十二年公にせる魯國權勢増加論に於て此遺言狀に論及せる者なり、而して、此二氏に就きて關係の有無を研究せむには、左の三の場合を假定せざるべからず、

(一) G ——— L

G はグリアーデー氏、L はレシニア氏、E はナイト、ヲフ、エオンにして、此遺言狀をヘートルスボルグ府より持來りて、佛王に獻せしといふ、即ちG

(二) L — G

(三) E — G
 L

リアーデー氏の原書なり、
第一の場合は、ゲリアーデー氏の與へたる全文を、レシユア氏の引用して
抜萃を作りたる場合なり、然れどもゲ氏は一千八百三十六年に出版し、レ
氏は、一千八百二十二年に出版なしを以て、ゲ氏はレ氏より遅ること約廿
五年なれば、レ氏がゲ氏の著を利用すること理に於てあるべからず、即ち
此假定は無効に歸し終る、

第二の場合は、レシユア氏の著より、ゲリアーデー氏が寫し取りたる場合なり、前述の如く、ゲ
氏はレ氏より遅ること約二十五年なるを以て、單に年代の上より論ずれば、あり得べき場合な
り、然るにレシユア氏は單に遺言狀の摘要を擧ぐるに止まり、之に反して、ゲリアーデー氏は其
全文を與ふるより見れば、ゲ氏は到底レ氏を寫したりといふべからず、勿論ゲリアーデー氏は、
レシユア氏摘要を種として自己の腦中より之を増補し、以て彼得大帝の遺言狀と稱したるものと
すれば、此假定も有効となれども、今はさる斷定を下すべき證據を有せざれば、此假定を無効と
爲すの外策なし、

第一及び第二の假定既に無効に歸し終れり、第三の假定は如何に、此場合は、一千七百五十七年
ナイト、チア、エオンが久しく魯京に滞在せし折、此遺言狀を見ることを得て、歸國の後佛蘭西
王路易第十五世に献しきといふなる古文書に基き、ゲリアーデー氏は其全文を寫し、レシユア氏
は之れを抜萃して摘要を作りたりといふ場合なり、而してゲリアーデー氏は毫も私意を以てエチ

アの原文を變更する事なくして、其全文を寫したりと假定すれば、ゲ氏とエオンの文書とは些の
相違無きを以てGとEと同しく、G — Lとなり、即ち第一の假定となる、言を換へていはし、
第一の假定と第三の假定とは同じ者にして、此兩者の原文は、エオンの魯國より持來りたる古文
書なりといふこと、此場合に於て唯一の説なるべし、

因て今はレシユアの摘要も、ゲリアーデーの全文も、全く研究の必要を見ざるに至れり、余輩は
單に兩者の根源たる、エオンの文書に就きて研究し、エオンの人物、彼が此遺言狀を得たる事情、
及び彼が果して真正なる遺言狀を傳へたるやの點に就き研究するの他策なきに至れり、

以上述へ來りたる如く、此遺言狀に對する研究は、數多の歴史家の熱心なる研究にも關らず、忙
乎として容易に眞似を知るべからず、歴史家折角の苦心も將に水泡に歸せむとせり、皇天其熱心
を憐み給ひけん、意外の邊より意外の手掛りを得て、正確なる斷定を下し得るに至れり、是を彼
得大帝の第三の遺言狀の發見なりとす、何年頃の事なりしか忘却したれども、獨逸ベルリン府に
於て第三の遺言狀出版せられぬ、勿論此文書は彼得大帝の遺言狀とはいはず、彼得大帝の教へた
る魯西亞帝國國威擴張策の摘要と題せられ、前二者と同じく亦佛蘭西文にて認めたりき、今此文書
の各箇條を列記する必要なければ、單に其要をいはむに、此文書は、其第七章までは、レシユア
氏の與へたるものと殆んど同文なれども、レシユアの第八章は此文書に見えず、且つ第九章以下
には大なる相違あるを認む、勿論其大意に至りては、二者の間に大徑庭なしと知るべし、因て此
文書の出所を探索せしに、此文書は、波蘭國の貴族と名乗れるソホルニッキといふ人の手より出

たるなりといへり、蓋し此人は一千七百九十三年、同じき九十五年の兩度に於て、隣邦なる強國魯西亞、埃太利及び普魯西亞三國の爲めに波蘭を分領せらるゝに至り慨然として國を去り、歐洲諸國を漫遊し、常に機會を窺ふて波蘭の恢復獨立を謀り、忍びくゝて同志者を糾合せむとせしが、氏の埃京に潜伏しをる際、偶然の事よりして警官の異む所となり、終に拘引せられて家宅搜索を行はれ、其際此文書を發見したる次第なり、時に一千七百九十八年、波蘭の滅亡を去ること五年の事なり、其際此文書の他三種の書類を發見せしが、其一千七百九十八年十月十九日の日附にて、佛蘭西共和國政府に送りたる手記にして、波蘭人を採用してポール軍隊を編制されむことを請願したる者、其二は余の觀察と題して、所謂彼得大帝の遺言狀といふ者に就きて永々しき批評を試みたる者、其三は、以太利なる波蘭人より編制したるポール軍隊の司令官に宛たる私の書狀なりき、埃國政府は此等の書類を得て、深く彼得大帝の謀略に注意する所あり、詳細に之を調べたるに、ソコルニツキ氏曰く、予は波蘭の回復を謀らむとしてならず、爲めに魯國政府に捕はれ、魯都シント、ペートルスブルグ府なる監獄に繋留せられ居ること約二年、余は深く敵國の勢力のしかく隆盛なる所以を思ひて之を得ず、幽鬱疾を得むとしけるが、偶然にも同囚の友が余の爲めに彼得大帝の謀略なるものを語り、余か多年の疑問を解釋するの幸を與へたりき、蓋し同囚の友なる者は、嘗て魯國古文書局(アルヒーブ)に職を奉せしが、事を以て罪を得、余と同室に繋留せられたる者なり、彼古文書局に在りしとき、偶然此遺言狀を見るを得て、天下の至珍とし、秘に之を暗記し置きけるが、終に始めて余に向ひて其秘密を漏せるなりき、されば、余は反覆其口

授を乞ひて之を記憶に存し置き、釋されて出獄するに及び之を筆記し置けるなり、天下廣しと雖も、民人多しと雖も、彼得大帝の遺言狀を窺ひ得し者、恐らくは天下に余一人あるのみならむと、澳國政府は之を聞きて大に驚き、深く魯國の志遠大なるに杞憂を抱き、先づ此文書を公にし列國をして魯國に對し備ふところあらしむるを必要と認め、之を獨逸政府に送り、終にベルリン府にて出版さるに至れるなり、

以上の事情より察すれば、ソコルニツキ氏は波蘭回復を謀ること急なれども、獨力効を收め難きを思ひ、彼得帝の遺言狀を公にして之に批評を加へ、以て歐洲各國をして魯國に對して激動せしめ、己れ間に處して爲すあらむとせしや明なり、而して氏の最も望を屬せしは、當時勢天下に奮ひ同時に魯國に對して懔然たらざる佛國政府を挑撥するにありて、先づ之を佛國に送り、續きて他國へも發送せむと欲し、其未だ發せざるに先ち澳國政府に押收せられたるが如し、されば佛國文書局には、氏の手書現存すといふ、依是觀之ソコルニツキ氏が遺言狀を筆記するに當り、自國語を用ひずして、佛蘭西語を用ひしは、充分説明するを得べし、如此ソコルニツキ氏が彼得大帝の遺言狀を利用して天下を激動せむとせし事情明白なる以上は、又一步進みて、此遺言狀は氏の偽作にあらざるやの疑問を提出するを得べし、(次號(續く))

カントの性行

講師 得能 文

秋來ぬと目にはさやかに見えねども漸瀝たる風の音一しほ身にしみて學びの窓の夕暮に獨り顔を

支へて遙かに先哲の性行を緬思するはいと興ある業なりかし蓋し偉人の性行は永く其生命を有し吾人後生の龜鑑となり或は肅然として襟を正ふせしめ或は凜然として決起せしめ又た或は慚然として自失せしむ其肅然たらしむるは畏敬欽仰の念なり其凜然たらしむるは自立奮起の念なり而して其慚然たらしむるは自ら顧みて遙かに己れの及ばざるを悲しむの念なり嗚呼偉人の性行は德善の實現なり吾人の標星なり豈に忽諸に附す可けんや

カントは思想界の一大偉人なり其性行亦た大に見るべきものあり殊に吾輩に取て實に哲理的思想の淵源となれるが故に何となく其人と爲りも慕はしく思はるゝ儘茲に先づ其性行の一斑を述べて同好の士に示さむ

カントは其先「スコットランド」より出づ其祖父に至りて獨乙に移住せり「カント」の父は多くの見女を有せしも皆な天し獨り第四子「イムマニユエル」のみ残れり「イムマニユエル」は千七百二十四年の四月二十二日に「ケーニヒスベルヒ」に生れ父は至て貧しく僅かに馬具を作るを以て其職となしたりき而して誠に實直なる敬神家なりき此時「ケーニヒスベルヒ」は「バイエテズム」(新教の一派)の盛んに勢力を有する處にしてカント幼より其訓練を受けたりき「カント」嘗て友人「リンツ」に書を贈りて曰く君は「バイエテズム」の主義に就て如何に批評を爲すとも其養成せられたる人物の高尙にして平靜愉逸克己等の美德を有するとは何人も拒否するを得ざるべしと「カント」が此種の感化を受けしは全く其虔敬なる慈母及び其師友「シユルツ」の力に因る「シユルツ」は「ケーニヒスベルヒ」の「コレギウム、フレデリキアヌム」學校の校長にして後ち同地の大學に於て神學教授とな

りし人なり「カント」は十歳の時此「フレデリキアヌム」學校に入りて嚴肅なる教育を受け其結果として後には正義の感念最も深く極めて嚴格なる道德主義を把持するに至りしなり其幼時は至ておとなしく軀軀も弱々しく人に逢ひてもおもはゆげに立振舞ひしかど讀書と沈思とは其最も嗜む所にして毫も厭くことを知らず一生の間更に變ることあらざりき去れど「カント」は心身共にやめるにはあらで殊に飲食に於て固く節制を守り起居動作誠に整齊して亂れざりしかば少しも病めることなく目出たき長壽を享けにき

「カント」の學校に在るや大に羅典の古學を好み殊に「ルクレチウス」の如きは其最も愛讀する所に於て羅典文を屬すること頗る巧妙なりき去れど希臘語に至ては左程精通したりきとは見え英佛の文にも頗る通する所ありしも唯だ文致に乏しきが爲めに後來世に出せる著述に於ては詰屈難解の點頗る多きは惜しむべきとこそ

千七百十四年「ケーニヒスベルヒ」大學に入り當時數學及び哲學の員外教授たりし「クヌッツェン」の感化により數學物理學等を研究せり「カント」は南親の意に乖かざらんが爲め「シユルツ」の神學講義に侍し且つ一二回説教を試みしとはありしかど到底僧侶となるの意志はあらざりしなり大學在學中其家計益々困難に陥りしが爲め満足に繼續する能はず已むを得ず私宅教師となりて辛くも苦學を爲しつゝありしが千七百四十六年其父死去せしかば全く在學の希望絶へて専ら私宅教師となりて其都市及び近郷を遍歴したるぞ憐れなる去れど其間に頗る社會の經驗を得て交際の道を心得たるはせめてもの慰藉なり

因に云ふ一説には「カント」の父死去せしは既に大學卒業後に在りと傳ふ其孰れか信なるやは今遽かに判する能はず

斯の如く落托失路の人となり覺束なくも九年の長日月を送りぬ凡人ならば或は不平を訴へて自暴自棄の境に陥るか左も無くば或は卑屈にも小成に安んぜしならん去れど「カント」は毫も不平を訴へず天を怨まず人を咎めず専ら温良恭謙を以て人に接せしかば常に雇主の親愛と尊敬とを得たりき而かも「カント」は自ら下劣なる教師なりと稱し行は言に従はずと遜言したり「カント」は堂々たる威儀も無く愛敬深き風采にも乏しく又た爽快なる辯舌をも有せざりしと雖も一たび之に接する時は優に暖風麗日の想ありしと云ふ

千七百五十五年「ケニヒスベルヒ」に歸り伯爵「カイゼルリッング」の家に雇はれ其教師となりしが友人「リヒテル」の親切なる補助に依り再び大學に入り其年の秋業を卒へて「ドクトル」の學位を得直に同大學の教授試補となりぬ此職は學生の謝儀を以て收入と爲すなるが故に其額極めて尠なく且一定したるとなし殊に「カント」講筵に侍するもの至て少數なりしかば其收入亦た極めて些少なりき「カント」は初め數學物理學論理學形而上學を講し稍々後に至りて倫理學人類學自然地理學を講し以て教授に欠員を生ずるを待ちたりき「カント」は極めて儉約を守りしも辛ふして充分の麵包をさへ得難き程の此卑職に在ること十五年の永きに及びこの内最後四年間は皇立圖書館の副員を兼ね一箇年五十圓の俸給を得たりき左れ其天は永く此偉人を屈抑せしめず千七百七十年に至り遂に豫て渴望せる所の「ケニヒスベルヒ」大學論理學及び哲學の教授に任命せられぬ此時年四十六

「カント」志を得ずして卑位に碌々たる間も常に雜誌等に論文を投じ名聲稍傳はりしが大學教授となりし時の開講演説は *De Mundi Sensibilibus et Intelligibilibus Forma et Principiis* と題するものにして此時既に大作「純理批判」の準備は其腦中に於て成熟しつゝありしなり

後ち十一年を経て有名なる純理批判は出版せられしかど其當時は餘り世人の注意を喚起せざりき六年の後ちカント六十三歳の頃に至り其眞價は廣く世間に傳稱せられ十年乃至十二年を経し頃には各所の大學に於て其哲學は講述せられ羅馬教の學校にすら入り込みたりしぞ目出たき「ケニヒスベルヒ」大學の「シュルツ」、柏林大學の「キーゼウエツテル」、「ハレ」大學の「ヤユグ」、「ライプチヒ」大學の「ポルン」及び「ハイデンライヒ」、「エナ」大學の「ラインホルド」及び「シュミット」、「ゲツチンゲン」大學の「ブーレ」、「マアルブルヒ」大學の「テンテマン」、「ギイツセン」大學の「ステル」等は皆なカントの哲學を祖述し盛んに其講筵を張り「テイフトルンク」、「ストイドリン」、「アムモン」等の神學者は之を基督教の主義及び其道徳に應用せんことを務めたり此に至てカントは一世の泰斗と仰がれケニヒスベルヒは學者の巡拜地と成り政府は爲めに給費留學生を送るに至り或はカントを呼んで第二の天使と爲すに至りぬ斯の如く名聲隆々たるもカントは更に感せざるものゝ如く尙は靜かに冥想を凝らしたり偉なるかな

千七百九十二年名聲最盛の時「カント」は其宗教意見に就き不幸にも時の政府と衝突を來たせり其の理性の範圍内に於ける宗教と題する論文の一部が柏林雜誌に顯はるゝや政府は其續稿を掲載するを禁止したり去れ共「カント」は「ケニヒスベルヒ」大學神學部の特許を得て「ケニヒスベルヒ」に

於て其全部を出版したり茲に於て政府は大に驚き竊かに命令を「カント」に送り皇帝「フリードリヒ、ウヰルヘルム」二世の不快を惹起すが故に以後は決して宗教問題に付ては講義若くは著述を爲す可らざる旨を告げたりカントは聊か争ふ所ありしも已むを得ずして之に従ひぬ千七百九十七年に皇帝崩御ありしかば其禁令は解けたりしも「カント」は爲めにいたく精神を害し身軀も亦大に衰弱したり依て「カント」は全く社會より退隱し講義も著述もせざりき晩年に至りて心身益々衰弱し終に千八百〇四年二月十二日消ゆるが如く溘焉としてゆきぬ壽八十

カントは終生娶らざりき蓋し初は餘りに貧しく後には風習既に定まりしが故に結婚を爲して生活の模様を變更するを好まざりしなり

「カント」の特性は變化を好まず自信の力厚く道德至て堅固なるに在りて其風習は最も規則立ちたるものにして所謂最も「キチン」としたるものなり渠は六十六歳の頃まで下宿屋住ひを爲し稍々蓄積の出來し後ち小屋を賃し毎日二人より少なからず七人より多からざる客を招て共に晚餐を爲しぬ毎朝五時には必ず早餐の卓に就き茶一椀點心數顆煙草一服を喫し寸刻を違へたるとなし喫煙は其好む所なりしも毎日唯此一回に限れり渠れの講堂に出るや決して定刻を誤らざり十五年間に於て五分とおくれたるとは一回もあらざりきと云ふ渠は二三時間講義を爲し午後は讀書と述作とに従事し凡ての準備に就き時間を守ると殆んど時計の如くなりしとぞ渠は客と對談するや諸般の問題に涉りしも自家の哲學に關しては語るとを欲せざりき

渠は非常に貧苦の境に陥りし時も決して負債を爲さざりき又た「エナ」、「エルランゲン」、「ハレ」等各

所の大學より招聘せられしも毫しも顧みず終始郷里の大學に在りて研鑽したり渠は旅行を好まず百マイル以上郷里を離れたるとわらずと雖も遠く天竺のと及び地文のとに至ては最も深遠なりき「カント」の従者に「ランベ」と呼ぶものありて頗る嚴格なる男なりき毎朝定刻に「カント」を起すものは此男なり「カント」晩年の頃此男死去せしかば「カント」も稍々ゆるみしと傳ふ

「カント」或時近邊の森林を散歩せしに一貴顯の馬車を驅て來るに逢ひ之に勸められ已むを得ず陪乘して數時間逍遙せしに爲めに大に時間を費やし既定の時間割を誤まりしかば以後は決して再び馬車にも乗らず又た此森に散策をも取らざりしと云ふ

佛國の「ルトソー」が「エミール」(教育書)を著すや「カント」は之を讀みて深く興に入り爲めに既定の時間を誤りしとて世は「エミール」の名譽を爲しにき

カントの學説は今之を措く其性行に至ては誠に紀律正しく寸毫も亂れず又た専ら溫良恭謙讓を以て其躬行となしぬ豈に君子人ならずや而して吾輩が今日「カント」の性行を叙する亦た豈に時に感ぜしに因るに非ざとせんや噫

立 志 (續)

林 安 繁

寬胃養氣

秋涼肅殺月明の夜。獨り原頭に立ちて秋水を手にし。吟咏詩歌徐ろに空を拂ふもの數多度。殺氣稜々心骨に透り。冷臭硝料鼻頭を貫く。月は秋水に映じて色益錆び。秋水寒光を承けて冷絶まよ

に裂けなんとす。嗟快や快や。此に至りて胸中外に清凉に分外に皎潔に。平生の心根去りて迹なく。居常の煩累其行く處を知らず。宛として萬里層氷の表に逍遙するが如く。天我の如く我天の如く。月我の如く我亦月に似たるの感なくんは非ざるべし。此に於てか情味以外に情味ある。一種言ふべからざる底本元の一物。湛然として目前に充つ。之を名けて浩然の氣と云ひ日本魂と稱す。試みに餘威を藉りて勇往奮進虎群狼集の間に突入せんか。居然として心志驚かす。優然として平地を走るか如けん。嗟快哉快哉。國家元氣なければ則ち亡ひ。人浩然の氣なくんは則ち碌々たるを免れじ。宜なり東坡翁の寬胃養氣を以て。人生の一義となせしと。蓋し思ふ心氣もと一躰。沈深として止水の如きものは便ち心。活達にして潑瀾たるものは便ち氣。之を人事に例ふ。心は王にして氣は便ち帥たり。是を以て形は氣に従ひ氣は心に従ふ。心動せざる時は氣も亦動せず。心平かにして物なき時は。氣も亦融然として滯るとなく。滿身一の間隙あるとなし。此に於てか邪を見ては則ち之を排し。惡を知りては之を拂ひ。言の謹むべきは之を謹み。行の改むべきは之を改め。凡そ煩累と妄想とを挫斷して克己の功を奏すると。實に猛虎の群羊を驅るが如く。虎群狼集の間に立ちて優々平地を走るが如けん。志氣相頼り相勵まし。依りて以て大に至誠の心を發揚するに於て。恐らくは間然する所なかるべし。是實に人生の最も重んずべきところ。若夫之に反して怠慢己を持し苟且自ら安んじ。絶えて心を養氣に注がざらんか。嚮きの所謂英勇以て和淑する所以の者。至誠以て大に期する所あらんとするもの。悉く水中の泡となり。甚しきに至りては。則ち心火逆上して兩脚氷雪の底に浸すが如く。雙耳溪聲の間を行くが如く。遂に治すべからざるの難症を齎らし。命根頓みに絶して空しく黃泉の客となり。其の未甚しからざる者も尙且盡忠報國の四字必らずしも忘却せしと云ふには非らず。英勇豪傑必らずしも羨望せすと云ふには非ずと雖も。遂には薄志弱行小成に安んじ小祿に甘んじ。同じく人間に生れながら。一箇の姓名だも正史に留むると能はず。空しく茶毘一邊の烟となり。累々たる墳塋時に秋風狼犬の見舞ふあるのみならんとす。豈に嘆ずべきの限に非ずや。宜なり古人『身を保つのは氣を養ふに若かず。氣盡くる時は身死し。民衰ふる時は國亡ぶ』と云ふ所以の者。是を以て昔の英勇豪傑皆心を此に用ゐ。造次顛沛も氣を養ふを忘るゝとなく。慣習の久しき。能く機に臨み變に應じて其の宜しきに従ふに至る。是に於てか從容迫まらず綽々として餘裕あり。妙は形に現はれ用は器に顯じ。人をして轉恐敬の念に堪えざらしめ。風采凜乎犯すべからざらしむ。君見ずや彼れヒューンスフ井ルト侯を。彼れが大任を擔ふて伯林會議に列するや。賊徃々にして侯を刺さんとする者あり。而かも侯恬然として顧みず。優々杖を振りて郊外に散策す。是れ豈に豪氣堂々底の人に非ずして能くする所ならんや。又見ずや本多平八郎忠勝を。長湫の戦手兵僅かに三百。川を隔て、戦を秀吉幾萬の大軍に挑み。自ら從容馬を河水に飲せしめ。秀吉をして遂に一矢を報ゆると能はざらしめし所以の者。豈に大氣大勇の人に非ずして能くする所ならんや。其他西行の文覺を屈し。象山の一虎皮を以て。松陰を唯々たらしめ。利休の一瞥遂に清正をして刀を抜くと能はざらしめ。死せる孔明生ける仲達を走せしが如き。皆是れ元氣潑瀾として混然宇宙に彌滿するに由らすんば非ざる也。然らば即ち之を修すると如何。思ふに其法たる蓋し多々あらんか。或は劍術よりするも可。

或は柔道よりするも可。然かも劍術柔道の事也己に之を知る。必らず余が喋々を待たざる也。此を以て今は天狗藝術論に記するところを謄寫せん。恐らくは入り易からんか。其の法に曰く。正襟端坐、膝の上部を正うし。胸と肩とを左右に開き。思を沈め、乃慮を徹し。靜かに呼吸を數へなば。其初は呼吸急迫にして收む可からずと雖も。之をなすと良久うして呼吸漸く平かに。頭胸臍脚指蹠の脈搏其の符を合すが如く。血液全身に充盈して新陳代謝宜しきを得。氣滯るところあれば則ち痛痒を感じず。此に於てか臍下瓠然として未だ打たざるの鞠の如く。所謂寬胃養氣と云ふもの。此に於てか便ち殆かし。之を務めて怠らざれば。氣宇爽然として王の如く。轉乾坤を聳動するの概あらんと。嗟余輩や志己に立つ。何ぞ甘んじて龍頭蛇尾に陥る者ならんや。その氣を修するに於て孜孜として倦まざらば。希くは南洲の所謂『己に克つに事々物々時にのぞみて克つ様にては克ち得られぬものなり。豫ねて氣象を以て勝ち居れよ』と云ふ者。達するに近からん乎。

撰友

凡そ社交の間に立つ者。其交る處何ぞ限らん。然りと雖も多くは一時の豪興により。或は單に利害を同うするが故に。假りに臍を交へて知友と云ひ。肩を叩て辱知となすもの。豈に言ふに足らんや。一旦利害を殊にし其所を同うせざるに至りては相視ると路人の如く。有事の時に際會するも。亦昔日の交には非るなり。之を名けて損友と云ふ。此を以て義勇奉公他日大に期する所あらんとする者。其身を持するや尊且重。善は即ち之を勧め。惡は即ち之を去り。面を犯して己を規彈する底の人を求め得て心術を吐露し。文につけ武につけ志を同うして。只管義勇の心を研かば、

至誠の心を發揚するに於て。其功蓋し鮮少には非る可し。之を名けて益友と云ふ。然るをみたりに其の人を極めずして肺肝を吐露し盡さんか。恐らくは彼が術中に陥りて意外の災厄を被ふるに至らん也。梧陰先生の勿徃交と云ひしは實に故ある哉。然りと雖も交道は亦極めて廣きを要す。實に周公哺を吐き髪を握りて賓客に接するが如くならざる可からず。其善と惡と損と益とを論ずるとなく。辭を卑くし禮を厚うし。専ら誠實を以て交るべく。惡は則ち善に導き。善は則ち引て以て己れの足らざるを補ひ。群猶の間に芳叢を探ぐるは。實に友道の最も謹むべき所。友を擇ぶの要實に此に在りて存す。

擇師

師を擇ぶの要も亦友を擇ぶの要と相待ちて便ち起る。蓋し己れの足らざるを補はんが爲め也。師を擇ぶと云ふ人或は之を怪しまん。然りと雖も余が所謂師なる者は。實に當今の所謂師には非る也。今や科學にもあれ文學にもあれ。其良師匠の多き又何等の遺憾か之れ有らんや。只その心事を吐露して教を待ち。己れの積弊を指摘して懇々提撕の勞を取るもの。或は坐前に踞まるに及んや。無言の間に己れが邪念煩累を消却し。尋常應接の間にありて即ち大に益する底の人。豈に夫れ得易からんや。嘗て之を老祖に聞く。東都一奇人あり。間中義之と云ひ雲帆と號す(此人の消息今知諸君之を知る者あらば願くは御一報あれ不幸黃泉の客ならんには墓碣の所を知るも亦可なり)奇狂にして狷介世に容られず。粗糞大豆を交へて僅かに糊口をつなぐ。大沼枕山は莫逆の友たり。嘗て少にして大坂に在り。常に山陽の名を聞て欽慕せず。一日鞋を穿ちて先生を江都(京都)なりしか今覺えず)に訪ふ。先生逢はす。快々として歸る。再び

問ふに及んで先生亦逢はず。三たび尋ねて先生亦々逢はず。義之悄然又憤然涙自ら下る。以思咄山陽の無禮漢。吾今一貧生なりと雖も。豈に他日風雲に際會せる期なしとせんや。然るを彼れ傲然己を持し。人を待つ禮を誤る。嗟咄々余生涯亦刺を通せじと。搦せすして即ち去る。下婢その辭色穩かならざるを知り。急に先生に告ぐ。先生之を憐み途にして之を呼はしむ。義之尙快々延かれて奥に入る。至れば先生温容閑雅綽々として餘裕あり。起居又更らに景すし。便ち一詩を出して斧正を仰く。先生婉然提撕具さに務め。混々汨々談つて倦ます。恰も舊子弟の如く然り。義之此に至りて涙潸然。疑團釋然として景慕の情益厚きを加ふ。是より先に至るまで薰陶を辱うし。得る所たゞに詩歌のみには非ざりしと。余聞きて慨然。竊かに蕃山の三日三夜蕪下に宿して。藤樹先生を景慕せし所の者を考へ。近くは西毅一先生の岡山閑谷に在りて。懇到篤實烈公蕃山の古を忍び。大に國家の爲めに子弟を教養せらるゝを思ひ。胸中慷慨天を仰いて浩嘆するもの良久之矣。嗟松陰は象山の門下に出で。南洲は東湖の驥尾に附し。彌二亦松陰の門下に入りしを思はし。擇師の事豈に對岸の火災視すへけんや。

説き去り説き來り。改行、謹言、養氣、擇友、擇師の要概此の如し。若夫れ余輩にして一意専心心の向ふ所を貫き、直進前往左右を顧みず。元氣盈々行を改め言を謹み。良友により良師に導かれ。依りて以て至誠の心を發揚せんか。天地も感し鬼神も動き。神人交も此れか助となり。荆棘榛莽倏忽として便ち消除し去らん。見すや彼れ高山正之か宮闕を仰いて。草茅之臣正之と叫ひし者。如何に後進の志士を激せしめしかを。世忠去りて白遊子と遊び。膽菴累りに敗竄せられて。諸道

群盜蜂起するの時。獨り赤誠の涙を揮ひ。盡忠報國身を殺して仁をなせし岳忠武王は。如何に敵軍の將士を感動せしめしかを。如何に河南の士民を慟哭せしめしかを。陛下畏くも賜ふに

高位を以てし給ひ。千歳徳を稱して欽仰措かざる者。豈に至誠の人を感せしめしに非る歟。而して其至誠に感する者。果して有情の人のみなるか。曰否。無情の木石と雖も猶且誠に感す。乞ふ之を武谷水城氏の涙松記に徴せよ。

至誠之感物也。有不可以常理而律者也。人之能感誠者。不必無之。禽獸之無智。有猶時乎能感其誠者也。昔者有狗。致驅主家。報恩泉下。至今稱義狗。有雞。哺乳非類。狗兒全生。至今誦董行。是豈禽獸感人至誠。而然者非乎。然。禽獸猶有意。草木則非情。豈有感情之理哉。而今也有淚松云。長州芳宜城南。有一大松。鬱然如車蓋。名曰淚松。出國者。悲願此而離故鄉。歸國者。喜望此而漸近舊里。悲喜之情。皆使人垂淚。是古之所以名也。嘉永季年。州人松陰吉田先生。觀外夷侵凌上國。而內事日非。慷慨奮發。有所謀爲。而獲罪幕府。檻車東行。過淚松下。賦國詩。向松而自慨。歌曰。還頁次登。思定之。旅難連婆。比圖之徐奴流留。淚松可難。松從此而綠色凋衰。及先生冤死。松亦枯死矣。淚松之名。於茲乎益奇也。嗚呼志士之誠。使能無情之松而感乎。將古松之靈者。能知志士之誠。悲慨以自死乎。抑志士之誠。古松之靈。相感而然乎。蓋亦可言奇緣也。今也世道陵夷。衣冠之卿。變左衽之俗。忠孝之心。將化腥膻之氣。媚新而捨舊。見利而忘義。士之能無羞義狗淚松之靈者。果有若干乎。嗟々至誠の無情有情を感せしむるや業に已に此の如きものあり。若夫 皇祖皇宗の御威靈國家

を守り給ひ。忠臣義士孝子の魂魄永く留りて國家を護るあらは。いすくんそ之れか至誠に感して荆棘榛莽を排闥するに助けたまはさるべき。落漠荒涼無情の木石も。憐れ垂れ哀を殘こして以て余輩に與みせさるべき。是に至りて煩惱妄想自然に消除し。一碧清空雲翳を見す。所謂天地萬物と一體となり。心の欲するところに従ふて矩を踰えさる底純一無雜の境。其れ或は達するに殆からんか。英勇豪傑は掛りて鼻頭に在らん也。盡忠報國豈に爲し得へからすとせんや。是に至りて立志の效其の終を全うすと云ふべき者非耶。

語を寄す神州幾多血精の男兒。何爲れそ奮ふて最難最險の道路を攀り。荆棘榛莽を開闢して英勇豪傑となり。立志の功をして其終を全うするとをなさるや。古往古來事茫茫盛衰隆替は便ちあり。然かも山河舊に據り依然として青々。何れの地として性を養ふに足らざる。 皇統連綿天壤と共に極りなし。何れの時か公に奉し國に報するの時に非ざる。嗟々歐米は後に在り朝清前に患をなす。何そ英勇を古人にのみ求めて自ら小成に甘んずるの時ならんや。碌々美髯を貯へて小祿に安んず。余輩の斷して効ふ所に非るなり。滔々風貌を婉にして青樓に酌む。余輩國家のために之を悲む。嗟々近世人傑の出でさるもの久し。抑も立志其始めありて終りなきの致すところ多きに由るか。誰れか云ふ

恨殺滿朝林立士。一人無復似椒山。

と。嗟

天皇自正明、制度高萬古。生前未報恩。留作忠魂補。

之を解する者それ幾人そや。嗚呼々々潜然亦浩嘆に勝えさる也。書し了り片月軒頭にかゝりて露まさに滴たらんとし。虫聲唧々怨斷々矣。

莊子管見

春秋 原 在 文

人其の生の自然に逆ふて之を害せず、亦其の材の美を積伐して事を謀るなくんば、能く身を保ち壽を樂み以て安らかに天年を終へ得べきも、其の之を爲す所以のものは、形骸を惜むの故にあらざして、一に物外に超然たるの徳を全くせんと欲すればなり、徳とは道の用を得るの謂にして、虚靈不昧以て衆妙の源たるものなり、凡そ物其の異なる者よりして之を見れば肝膽も越楚なり、其の同じきものよりして之を見れば萬物皆一なり、故に耳目の宜しき所を忘れて、心を徳の和に遊ばしめば、物皆一にして敢て變ずるなし、亦何の喪ふ所かあらん、是を以て王貽其の足を喪ふを見る猶土を遺すか如く、申徒嘉十九年にして未だ其の兀者なるを知らず、噫死生大なりと雖ども唯形骸に於てのみ然り、若し其の徳に到りては、天地の覆墜するあるも亦爲に變せざるなり、彼の始を保つの徴、懼れざるの實、唯將に名を求めんとするに止まれり、而も勇士一人雄を以て九軍に入る可し、况んや天地を官し萬物を府し以て衆生を正し日を擇て登假せんとする者、寧ぞ死生の以て其の意に介するあらんや、夫れ死生存亡窮達貧富は皆事の變にして命の行なり、故に其の奈何ともすべからざるをすれば、爲めに思を勞し心を動すなし、思を勞し心を動すなければ神樂みて氣乖かず、神樂みて氣乖かず之を才全しと云ふ、才全ければ内之を保ちて外之を蕩せず

内之を保ちて外之を蕩せず之を徳形はれずと云ふ、才全くして徳形はれざるものは人の形ありて人の情なきものなり、人の形あり故に人の徒となりて世に立つ事を得、人の情なし故に天の配となりて是非に累せられざるを得、噫其の人に屬する眇乎として小なる如きも、其の能く天を成す實に警乎として大なりと云ふべし、彼の叔山無趾己の兀者たるを顧みずして、孔子を以て天刑の救ふべからざる者と稱す、豈故なしとせんや、惠子疑ふらく人にして情なくんば焉ぞ人と稱するを得んと、莊子之に答へて曰く

道與之貌天與之形惡得不謂之人

惠子尙達せずして曰く、既に之を人と謂ふ惡ぞ情なきを得んと、莊子乃ち曰く

是非吾所謂情也吾所謂無情者言人之不以好惡内傷其身常因自然而不益生也

人或は曰はん生を益さずんば何を以てか其の身を有たんと、然れども好惡を以て自ら其の身を傷ふ、傷ければ、身既に道と體たり天と徒なり、生理本と自ら足る亦何の益す所かあらん夫れ人の爲す所を知るものは能く人の形を有ち、天の爲す所を知るものは能く人の情を外にす、天の爲す所を知るものは天にして生ずるなり、人の爲す所を知るものは其の知る所を以て、其の知る知らざる所を養て天年を終へて中道に天せず、然りと雖ども天人本と二理あるにあらず唯道に之れ據れり、故に天に宜しき所は人に宜しき所なり、人に宜しき所は天に宜しき所なり、而して其の之を知る一に道と合するの真知に到らざんば能はず、能く真知を得る之を眞人と云ふ故に眞人心道と合し行天に同じ、徳此に到れば自利利他相戻るなくして、己の爲にするも人之を

益とし、人の爲めにするも亦己を利せん、彼の狐不偕務光伯夷齊等は徳未だ眞に及ばざる者、故に人の適に適して己の適に適せず、身を殺して眞ならざるなり、唯眞人國を亡ぼして民心を失はず、世を利して人却て之を忘る、凄然として秋の如く煖然として春に似、喜怒哀時に通し物と宜しきありて其の極を知る莫なし、噫亦盛ならずや

抑も死生は尙夜旦の常あるが如く、人力の得て奈何ともすべからざる所なり、假令死を惡み生を喜ぶの念頗る強しと雖ども、其の命に於て何の救ふ所かあらん、今舟を壑に藏め山を澤に藏め之を固しと云ふ、然も夜半力ある者之を負ふて走る昧者は知らざるなり、彼の生を貪り死を惡むの輩眞に昧者の徒なるのみ、豈に憐むに堪ゆべけんや、夫れ大塊我を載するに形を以てし我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし我を息するに死を以てす、吾生を善くするは即ち吾死を善くするの所以なり、心既に天と合すれば生死即ち道なり、受けて之に従ひ忘れて之を復へす焉ぞ爲めに好惡すべけんや、若し生を好み死を惡むと云はゞ之れ愚のみ、若し生を惡み死を好むと云はゞ之れ狂のみ、小を大に藏むる宜に似たるを尙遯るゝ所ありて、天下を天下に藏むるの遯るゝ所なきに如かず、生死を好惡する焉ぞ之を道とし任して遯るゝ所なきものに如かんや、莊子嘗て曰へらく

泉涸魚相與處於陸相响以濕相濡以沫不如相忘於江湖與其譽堯而非桀也不如兩忘而化其道

噫人生死の間に役々として、暫く生するを以て幸と爲し、暫く死せざるを以て懼と爲すは、魚の陸に居て濕を响し沫を濡するの類のみ、寧ぞ夫れ生死を以て心を用ゆるなき、魚の江湖に相忘る

る如きに若かんや、其の生を好み死を惡むは、堯を譽め桀を誅するの徒のみ、焉ぞ夫れ二つながら忘れて其の道に化するに若かんや、故に眞人生を悦ぶを知らず死を惡むを知らず、其の出づる喜ばず其の入る距まず、儻然として往き儻然として來り、其の始まる所を忘れ其の終る所を求めず受けて之に順ひ忘れて之を復へす、大なる哉其の徳、男子唯須らく遯る事を得ざるに遊びて其の眞を存し、以て其の徳に到るを期すべきなり、何すれぞ忡々として死生を以て心を傷ましむるの愚を學ぶべけんや

夫れ得は時なり失は順なり、時に安じて順に處すれば哀樂入る能はず、之れ古の所謂懸解にして人事の羈絆を解きたるものなり、人の事物に束縛せられて自ら其の欲する所に適する能はざる、一に生を悦び死を惡むの心之を結めばなり、今一度死生の累を脱却するを得ば、窮達貧富の如き何すれぞ亦心を煩はすに足らんや、行道と合し心天と配す、世遂に怨むべきの事なし、故に往昔子輿の病む其の友に語りて曰く

浸假而化予之左臂以爲鷄予因以求時夜浸假而化予之右臂以爲彈予因以求鴟靈浸假而化予之尻以爲輪以神爲馬予因而乘之豈更駕哉

噫物の天に勝たざる夫れ久し、何ぞ吾の獨り之に勝たん事を望まんや、父母の子に於ける東西南北唯命に之れ従ふ、陰陽の人に於ける翅に父母に於けるのみならず、我焉ぞ之に逆ふ事を爲さん彼吾に死を近く我之を聽かざれば、則我の悍なり彼何の罪あらんや、今大冶金を鑄るに當つて、金踊躍して我且に必ず莫邪たらんと曰は、大冶必ず以て不祥の金となさん、今一度人の形を犯

して人たらんのみと曰は、夫の造化なる者必ず以て不祥の人となさん、然らば即ち天地を以て大鑪となし造化を以て大冶となさは、惡くに往てか不可なるあらんや、我を以て鼠肝となし我を以て蟲臂となすも、其の爲す所に任し其の往く所に委して可なり、嘗て子桑江の死する孟子反子琴張の二人尸に臨み琴を鼓して歌ふ、孔子爲めに子貢に教へて曰く

彼方且與造物者爲人而遊乎天地之一氣彼以生爲附贅縣疣以死爲決疣潰癰夫若然又惡知死生先後之所在假於異物託於同體忘其肝膽遺其耳目反覆終始不知端倪茫然彷徨乎塵垢之外逍遙乎無爲之業彼又惡能憤々然爲世俗之禮以觀衆人之耳目哉

此等の士は皆道に相造り、無事にして生定まれるものなり、無事にして生既に定まる、故に生を忘れ道を忘れ、唯同乎として化に乗し、亦作爲する所なし、已に生する所以を忘る焉ぞ亦哭する所以を知らんや、是れを以て孟孫才其の母死し哭泣涕無く、中心感まず喪に居て哀まず、而も善喪を以て魯國を蓋ふ、已に道とする所以を忘る焉ぞ亦善とする所以を知らんや、故に許由仁義を以て黥となし是非を以て劓とす、世の昧者夢に居て覺たりとなし、其の然る所以を知らず、眞に憐むべきなり、彼の顔回道を修むるの極、仁義を忘れ禮樂を忘れ、遂に肢體を墮り聰明を黜け、形を離れ知を去り大通に同じて其の坐するを忘れたり、身道と申しければ則ち好む事なく、行化に乗すれば則ち常なし、亦何をか記して知るありと爲さんや

夫れ肢體を墮り聰明を却け、形を離れ知を去り大通に同す、之れ眞に道の極致にして大に尊ぶべきの所なり、然れども道の用豈に之に盡きんや、若し其の爲す所僅に此に止まり、人を絶ち世を

逃れて以て獨立するの外なきものとせば之れ私のみ、天尙私覆なし道焉ぞ己に止まつて人に及ばざるの私あらんや、故に真人累なきに其の身を忘ると雖ども、亦天に繼いて極を以て天を開きて治を出し、身に宜しき所之人に宜しくせしむ、然れども真人の之を爲す其の美を衒ひ名に誇るの所以にあらず、唯己むを得ざるに應じて之を爲すのみ、美を衒ひ名に誇る之れ私なり、若し今私を以て天下を濟せんと欲せば、天下は擾々として夫れ愈亂れん、唯己む事を得ずして之に應ず故に知なく欲なく化に任して妨げず、是を以て明王の治、功天下を蓋ふて己よりせざるに似、化萬物に貸して民恃ます、有れども名を擧ぐる事なく不測に立て無有に遊ふ、昔天根殷陽に遊びて蓼水の上に至り、適無名の人に遭ふて天下を治むる事を請ひ問ふ、無名の人叱して曰く、去れよ汝は鄙人なり、何すれぞ問ふ事の預からざるや、予方に將に造物者と人たらんとす、厭く時は則夫の莽眇の鳥に乗して、以て六極の外に出で無何有の郷に遊ひ、以て壙垠の野に處らんとす、汝又何の故ぞ天下を治むるを以て予か心を感ずる事を爲ると、而して其の再び問ふに答へて曰く、汝の心を淡に遊はし氣を漠に合し、物の自然に順ふて私を容るゝ無くんば天下治まらんと、然るに世事茲に出でず盛に經式義度を立て、以て人を抑壓せんとす、實に惑へりと云ふへきなり、夫れ鳥を高飛して以て箱弋の害を避け、鼯鼠を神丘の下に深穴して以て薰鑿の患を避く、人の知何ぞ此の二蟲の下に出でんや、其の抑壓の己に利ならざるを見れば必ず避て之を攪さん、斯の如くにして治を求むる猶海を涉り河を鑿り、蚊をして山を負はしむる如く夫れ却て大難を醸さん、天下を治むるの道他なし、石の戸と爲るなく謀の府と爲るなく、事の任と爲るなく、知の主と爲る

なく、無窮を體盡して無朕に遊ひ、其の天に受くる所を盡して得る事を見ずなく、唯能く虚なるのみ、莊子之の間の消息を傳へて曰く

南海之帝爲儻北海之帝爲忽中央之帝爲渾沌儻與忽時相與遇於渾沌之地渾沌待之甚善儻與忽謀報渾沌之德曰人皆有七竅以視聽食息此獨無有嘗試鑿之日鑿一竅七日而渾沌死

噫作爲して其の眞を破る音に事に益なきのみならず、却て事を害する甚しきものありて、終に無爲にして欲する所に任すの簡なるに若かず、學者夫れ意を致して可なり

(未完)

史 傳

國學復興者としての契沖阿闍梨(承前)

本 論 彼の事業

埋 木 乃 翁

第一 語學上の事業

契沖は語學の上に古く誤り來れるものを正し、新におのれの創見を加へて、亂れに亂れたる語學を振り起さまく企てたり、されど文法の上には尙得及ばずして、富士谷成章及本居宣長等の出づるに任せたり、唯假名遣を古の正しきものにかへしたるはまことに契沖に始まりしとにして、これのみにも契沖の名の頭に國學復興者てふ五文字を被らすに十分なる價值はあらむ、我國はもと言靈のさきはふ國と稱へて、社會の事單純なる間は言葉即歌となり文となりて言文一

致の姿なりければ、萬葉假名平假名片かな等つきくに出て來て言葉を假名にて寫すととなりし後も、その假名は古の呼法さながらに用ひたれば、その用ひ方に各々けじめありて露みだるゝ事なかりき、村上天皇の御代に源順がゑらびし和名類聚抄は實にその模型を世に残したるなり、然るに社會の事態複雑に赴くにつれ又漢文などの行はるゝにつれ、おのづから言文相離るゝに至り、さては世變戰亂などつきき、假名のとに意を留むるものなく、假名遣は古の呼法を示すものなりと云事をさへに忘るゝに至りては、其用法も亂れに亂れてきはまりなく、到底一定の法則を定めざる可らざるに至れり、こゝに和名抄の時代を下る事二百五十年ばかり、藤原定家なる歌人ありき、其叔父河内前司親行と相謀りて、ヲオ、エエム、イヰヒ、等の假名其聲似通ひたるが爲に彼と是と誤り易きを憂ひ、古の用格には據らずして、專斷を以て一の法則を定め、初めて定家假名又御所假名と稱する者出で來れり、而親行の孫行阿なる者、假名文字遣一卷を上梓し、祖父の説に加ふるに、ホワハムウフなどを新に區別して附載し、其後寛文年間荒木田盛徴なる者、前書の足らざるを補ひ類字假名遣七卷を著はしき、斯くて此定家假名は二條冷泉兩家に傳はりて實に四百五十年の間歌人社會を支配したり、尙此外に應永の比明魏法師は煩雜なる假名遣法を破りて皆一つに書くべしとの横議を挾むとありしより又此流を汲むものもありき、要するに徳川の比に至りては猶定家流になづみて其誤をうけつぐものに非れば、假名遣ある事を知るもの絶えてなかりしなり。契沖は此世に生れ此様を見て慨りぬ、憂ひぬ、遂に奮ひ起ちて之れが復古を唱へ、第一着に和字正濫抄五卷を著はし始めて古假名遣を世に紹介せり、是實に元祿六年の事なり。其

自序に曰、有音相似易濫者中葉以來學識俱降且不致意遂則匪翅以爲遠於等迄于四位寄椎逢寄藍木居寄戀縱令有斧正之手典據不明訛謬尙繁余介之懷久矣、とこれ以て契沖が此著をなし、意志を窺ふに足らむ。此書古事記日本紀より三代實錄に至るまでの國史、萬葉集古語拾遺延喜式古今集和名抄諸家集總て參考す可きは見及ぶに隨ひて之を引き、定家假名遣、悉曇、五音の圖、平假名片假名伊呂波字躰、伊呂波略註等を掲げ、定家假名遣が誤を傳へて其誤を正しきものどももひびがめしを駁し、まことに正しきは是なりと説き示せり、其行阿が假名文字遣を難じて曰、

此書混亂多きは親行も世俗流布の可なかに任せられけるか又行阿の添へられたる事に誤出來たるか又行阿の考へられたるホワハ等にも混亂あり無用の事なきに非ず、と

其斬新にして且正確なる意見を讀で、七百年來の夢まだ覺め難き當時の頑迷者が如何にあはてふためきしか又因循久しきに慣れて自ら正しきを得たりと誇りし傳授的歌人が如何に罵り怒りしかは想像するに堪へたり、果して橘成員なる者あり、契沖の説を駁せんが爲に元祿八年和字通例書八卷を世に公にせり、彼成員は實に明魏法師一流の人なりしなり、其論鋒はをかき點に歸着す彼は曰、假名遣の法往昔未定らず國史萬葉等に據ればとてオヲエエ等亂れて假名の證とは定め難し右の書を證據とする時は假名遣の法はなきなり何様に書ても苦しからぬなるべし假名の法は平上去入の四聲に従ひて定りぬといふべし云々、と斯の如き僻論はもとより一笑に附し去る可きものなるを、契沖の斯道に深切なる、若斯る僻論認て世に行はるゝ事あらば、漫に世の人を惑はすのみならず後人を謬る事も多からむ、捨て置く可きに非ずとて、元祿十一年五月更に和字正濫要

畧二卷を著はしぬ、其第一卷の冒頭和字正濫誦妨抄補改と題して、前著正濫抄中自ら誤れるを悟りしもの三十餘條と成員對辨駁とを掲げ、引用書目總て六十七部、經營慘憺の程想ひ見るべし。斯くて古假名は古學者の中に定家假名は二條家の中に傳はりて並び行はれしが、明治の大御代に國文興りてより此古假名を専用ふる事となりぬ、今に及びて古假名の事を知るを得るは、そも誰が力ぞや。されども當時草創、粗洩謬說免れがたし、こは本居宣長に至りて初めて完し、宣長曰、契沖が和字正濫抄を著はせる中に聊字音の假名に及ぼせる事あり其説に反切の上の字を以てイ井エエオヲ等を分つべしといへるは誤なり假名は反切にて分るゝ事に非ず契沖はかばかりの事を考へ誤る可き人には非るをこれは深く心を用ひずしてたゞ一わたりの理を以てふと定めたる説と見えて其證例にあげたる字の反切既に其假名にあはずまして其餘をや云々

彼は日本語の語法を知らまく欲せり、されど當時の文界は茫たり據て以て頼むべきなし、彼は已むを得ずして自己の少しく知れる悉曇の學によりて之を説明せんと企てたるが如し、そは假名の様を知らむと思はれ先づ聲の出る初の様を知るべし、もろこしの韻字はすべて知り侍らざ天竺の悉曇も僅に梵字をかくやうを習ひたるばかりにてはかばかしき事は知侍らぬと此國は天竺には遠ざかりながら聲はかへりて能通し唐には見花看月など先用をいひて後に躰をいふをこゝには花を見る月を観るとやうに先躰よりいひ然書く様も天竺に似たれば是によりてだにあらる心得侍るやうを申べし

とあるにて見るべし、彼が悉曇を據所として説きたために少からぬ謬も生じ又謬り來れる儘に不

可思議なる説明をもて了りし事もありしかども、亦これが爲に新しき見解を得たる事も二三のみに非るべし、いざやそをつぎつぎに尋ねまくほす。

彼は阿字本音の説を採れり、曰、

大日經に本不生故阿字現形といへり阿は口を開く最初の聲にて微隱に喉内にありてわざといはざれども息の出入に隨ふ故なり韻にありながらヌ音コエにて堅にイウエヲを生み横にカサタナハマヤラヲを生ず云々阿は一切の聲の初にて梵字の阿字は本不生の義なりイはアの聲舌にふれて轉じたる聲なり梵文に伊字を根本の義といふ故は草木の種を蒔てそれより始めて根を生ずる如く阿の聲始めて轉ずる故なりウは唇にふれて轉ずエはイより生ずエといふ時舌にふれて最初に隱微なるイの音添ひてイエといはるヲはウより生ずる故に初に隱微なるウの音そひて唇にふれてウヲといはる此二字の功を初に讓れば阿より生ずる也云々

彼は梵文の法に摩多の字を省して躰文の字に加ふる事あるよりして、五十音の通用に就て古人未見の法則を發見せり、曰、

アイウエヲは母韻にして通用の字には非ず五母韻字とウクスツヌアムエルウの十父聲字と相會ひて五十音の通用文字となる云々

彼は又五十音圖を作れり、横行を安加佐太奈波末也良和とし阿行を阿以字江遠とし加行以下は悉曇半濁法を用ひたり、こは従前の音圖の上に頗改良を加へたるものにして、イ井エエの所屬の如きは皆正しく列ねたり、こは悉曇より導き來れる事なるべしと雖亦古言を攻めたる結果による事

も少からざるべし、されど此契沖の音圖には猶阿行にヲを置き和行にオを置き全く彼我の所屬を誤りしは何事ぞ、既に悉曇字記にも明に阿伊歐諸奥と列ねたるをや、此所屬の誤は延てアオヲテの通用上にも謬を生じたる惜むべし、我國五十音圖に此所屬の誤を傳ふる事文治元年の管絃音義に始まりてこのかた六百年ばかり、安永年間本居宣長に至りて初めて之を發き得たり。

要之彼は古假名遣を復興し五十音の誤謬を或點まで改正し語學發達を催進し後の宣長等を起たしめ彼等に據所を與へ日本語學を輔け成したるなり。今日の博士達がいかにめしき表題をかゝげたる文法書の種子は既に此時に蒔れたるを知らずや。(第一終)

文苑

二十五聲の歌

か　つ　ら

春聲　上野山花見る人もきのふけふ數まさるらし聲のきこゆる
 夏聲　やくか如暑きま午は氷賣る聲聞くたにもすしかりけり
 秋聲　鐘の音萩の上風虫のこゑあきのあはれをあつめてそ聞く
 冬聲　折々の下折竹の音にのみおと立てす降るゆきを知るかな
 瀧聲　音に聞し音羽の瀧のたきの音は聞えぬ迄に幽かなりけり
 禱聲　わたつみの神や怒れる大波はとききの聲あけて寄せ來る也

虫聲　あなかまや／＼といへは中々に蚊の聲高くなる心地して
 櫓聲　蘆の葉のそよく邊に櫓の音のさやかに聞ゆ船や漕ぐらし
 鐘聲　亡人を野邊送して夕暮のかへるさに聞くやまでらのかね
 鈴聲　御社に詣つる人のたえずありて絶えず聞ゆる鈴のちと哉
 琴聲　誰ならむいつこなるらむ朧夜のよひよひ毎のことの調は
 砲聲　母上よ午けたうへむ午告るつゝの音たかく今きこゆるに
 砧聲　我背子の歸るを待ちて寝ぬ夜半に聞かしのすれど砧打音
 歌聲　霜おきて月影さむき舷頭にたれ粟とりてうたうたふらむ
 犬聲　やよ男あやしき者か出て見よ門守る犬のこゑしきるなり
 水聲　行なやむ山路の奥の草かくれかすかなれども水の音する
 笛聲　あなせはし車出つらし笛の音も頻にきこゆ今か出つらし
 鳥聲　我宿は鳥飼ふ家に近ければかしましきまで聲きこゆなり
 祝聲　高砂や相生松のしらへこそいつも聞け共めてたかりけれ
 鼓聲　月夜よみ狸も今宵うかれ出てししらへ合せき我鼓うてば
 賊聲　砲の音のやみて間もなく山川をとよもす聲や勝鬨のこゑ
 碁聲　青柳のいと長き日をあくこなく打くらしたる石のおど哉
 雨聲　やれ窓のやれ間に雨の吹入りて簷打音のすさまじきかな

哭聲　そら泣に我子の泣くを聞く母の實に泣くと思ひぬるかな
怨聲　七度の代をば更ふともいかに我晴さてやまむこれの怨を

劍舞

葛の屋主人

ますらをか太刀とるさまに誰も皆ふりおこすらん大和心を

從軍行

ものゝふの魂とよひつゝひめ置きし日本刀のきれ味をこれ

戰捷

兼ねてより思ひなからも今更に聞けはうれしきかち戰かな

戰死者

たれもみな死ぬる命をくじのため盡して死にしこれそ丈夫

紀念碑

武士のいさをし誌すいし文そよろつ世までの道しるへなり

題不知

長風子

たのめどもかひなきものは我宿の軒端にかゝるさゝかにの糸

秋風にふるさと訪ひし夢さめて枕邊近くこほろきのなく

全

全人

門邊にたてる旗すゝき

しのひくに招けども

とひとぬ人をまつ虫の

音のみさひしく聞ゆなり

發句

秋竹

樂園

暮かゝる崖とびくの紅葉哉

机うち古人のゝしる夜長かな

夕もみぢ寺千年を経たりけり

豆男

馬の尾に日脚おちゆく薄かな

掛稻にやせてひつつく稻子哉

雨戸引けば兔にげゝり蕎麥花

茸狩やうしろの山に人のこゑ

君去つて日にくゝあれぬ菊畑

ゆく秋をもみぢ林に惜みけり

屋根蒼て木曾人秋を送りけり

市村竹軒を慕ひて

樂園

鳥溪

野鼠のあめにぬれたり暮の秋

此月を誰となかめんたひの秋

濱田君千雄碑

村上 函 峯

濱田君千雄。高知縣人。本姓山中氏。出嗣濱田氏。天資豪放。不拘小節。夙學鄉譽。年十七遊東京。入原要義塾。轉入師範校。明治十七年七月卒業。爲札幌師範學校教諭。明年八月。轉長崎縣。兼小學督業。居數年。遷長崎縣第一高等小學校長。能盡力教育。其訓導子弟。極

有法度。暇則著書。以便童蒙。前後爲小學教員講習會講師。長崎市小學職員會長。言論懇到。聽者忘倦。二十七年七月。征清師起。君慨然曰。男兒可以有爲矣。辭職赴朝鮮。尋爲兵站司令部屬。會東學黨起。兵慶尙道善山。襲我營。君奮然挺進中。九斃。年三十三。實十月二十九日也。先死之二日。寄書友人永瀨伊一曰。東學匪徒。蜂起韓南。欲襲兵站部。以遮我後。然么麼賊。草薙禽獮。在我掌中。唯願爲先鋒。入北京耳。嗚呼何言之壯也。今而思之。即爲永訣。悲夫。故舊子弟。醴金。爲設法會於皓臺寺。會者千三百有餘人。亦可以見平日勤職。薰陶有素矣。諸子欲建碑以謀不朽。屬文於珍休。珍休嘗奉職長崎縣。與君爲同僚。義弗獲辭。乃作之銘曰。

豪放其性。

勤勉其習。

習與性成。

身死名立。

瓊浦之灣。

皓臺之丘。

有銘勒石。

茲垂千秋。

送水野遵赴任臺灣序

蓉湖

浦

井

信

昔者先王開國日千里。新羅置內官家。後方羊蹄設鎮府。猶嗟盛矣。中世以降。內治不振。無遠來遠人。綏荒服。弘安之元寇。僅止防禦。文祿之征韓。亦不遂志。予每緝國史。未嘗不歎古今之變遷也。降至德川氏。鎖國爲政。遂使英雄不復能展其志。伊達政宗之雄圖。徒有遣使于羅馬耳。遺憾果如何也。但山田長政。濱田彌兵衛等之事。差足強人意耳。若夫鄭成功之據台灣。乞援本邦也。紀南龍公。德憑出師。尾敬公亦欲自往。而幕議不允。其事終歎最可惜哉。今也否除而泰乘。復來

而剝往。征清軍捷。輝國威於宇內。台灣之島。終歸我版圖。實可謂續先王之遺烈者。於是乎。有爲之士。將展其技倆。踴躍而立亦宜矣。予友人茗溪水野君。量大腕敏。才兼雅俗。今任其行政長官。其政績之舉。廟堂諸公。矚目以俟焉。今也解纜有日。聞開別筵。會者若干。各有所述。言多涉政理兵法。蓋有所益于君也必矣。而予今隔境。不能陪其筵。况迂腐固陋。嗟復何言。無已則有一焉。但台灣之事蹟。散見于國史者。不一而足。鄭成功。濱田彌兵衛等。逸事遺跡。或有補史傳之缺者。且未開之地。多存上世風習。况其南方非律賓群島者。國史所稱。吐火羅。舍衛國等所在。或曰。天孫人種之故國也。果然。其風俗言語。必有裨益史學者。是予之所欲聞也。抑蕃俗難馴。招徠撫綏。其執掌不俟言。然君之敏腕。豈不綽有餘裕乎。予聞。昔人擬台灣。以高砂之稱。葡人亦名曰保兒慕沙。美麗洲之義也云。君退食委蛇。步柳樹之下。過芭蕉之叢。觀風景之美麗。感古今之變遷。必有發爲詩賦者。量大腕敏之人。胸中有關日月。故併望之。

雨喻

景齋

迂人

雨可以喻政矣。若夫當炎威烜灼。旱魃爲虐。草木枯槁。泉流盡涸之時。蒼生之望雲霓如饑渴。希雨露如命。猶方國家頹廢之時。苛法稅政踵至。土木工役隨興。黎民苦塗炭。衆庶不安其堵。且將想望良治太平歟。夫雨之霈然而降也。枯草勃然而起。涸水湧然溢焉。猶良胥在廟上。阿諛泆渥之徒。索然斂迹。天下靡然趨正。彬彬就條理。雖然。霖潦過度。則汎濫浸蝕。傷田害畝。法制亘於繁。則民庶倦其劇。倥傯離離。可無復顧名教貨殖之暇焉。古不云乎。過猶不及。爲後有司者。豈其可

不思哉。

馬說

駑馬之振鬣躡身跌踈也。人不能得而御之。駑馬之帖尾低頭徐步也。人可得而制之。蓋駑馬易制。駑馬難御常也。雖然。駑馬而至就王良造父之御。則前隄後跌。風奔電馳。一瞬而可致千里之遠矣。今也腥羶之氣。簇于四海。缺舌之語闐于六合。世道日衰。人心月澆。名教墜于地。德義掃世。人々反噬搏擊。事譎詐業欺罔。排擠交友。背負君親者。天下皆是也。嗚呼今日之民豈猶駑馬之不就控御歟。世豈無復王良造父之逸才乎。可勝嘆哉。爲馬說。

余友土川行齋今在東京帝國大學頃日簡余中有國詩一首情思清遠足以知君之近狀而任道之志凜然一日不廢是余之所以深致敬服也

望月の夕隅田川邊に遊ひけるとて

行齋

淋しさに誰まつち山尋ねきてかけもすみだの月を見しかな

酬土川行齋

熱童

幾寄相思客夢邊。仲秋感興獨堪憐。聖天堂畔人聲絕。一道光風月滿川。

幽栖秋至

葉都子

夢覺幽齋茶沸遲。窓前閑誦秋風辭。雁聲時報清商至。添得人間一段悲。

秋思

閑庭淒月照三更。遙聽天涯過雁聲。夢覺閨中無覓處。偶然想起古今情。

全

淒風蕭瑟號虫驚。月照閑庭夜色清。可憫不眠誰家婦。多情砧杵擣三更。

秋日偶感 (錄三首)

雁叫天涯斷又連。風過蕉上晝凄然。茅齋眠覺煎茶坐。憶在春朝上苑邊。樹々西風落葉深。一庭秋色香難尋。斜陽影裡南來雁。故使遠人增客心。騷客元甘一酒卮。不知兩鬢已如絲。秋來日々少年樂。驚破一朝臨鏡時。

秋暮憶人

極目蕭條秋正深。高樓懷友淚沾襟。天涯無那空相望。過雁一聲寄好音。

中秋得寒

晴空輾上水晶盤。素影玲瓏映畫欄。今夜家々開桂酒。樓頭總作庾公看。

雜錄

書籍目錄

緒論

長連恒

維新以來社會萬般の面目一新せしとともに、學問の潮流も亦た俄然加速度を以て進み來り、未だ

雜錄

四十一

其の停止する所を知らず、我輩學に此に従事する者誠に雙手を擧げて之を賀せずして可ならんや、然れども醜て思ふに爾來僅かに廿有八年、其の年月の短きに比ぶれば多ならずとなさずと雖ども、文學に科學に今日の狀景完全無缺の域に進めりとは未だ斷じて謂ふを得ざるなり、是の如きの世に遭遇するもの之れ果して吾人の不幸か、嗚呼何ぞ然らむ勇猛前進學海に於て發見すべきの餘地未だ盡きず、功を建つることの易きは何等の愉快ぞや、前に先進者なく後に後進者なく、我より古をなす底の事此時を捨て、果た何れの時にか求めん、然らば則ち吾人の境遇果して幸か、嗚呼何ぞまた然らん學海を渡るに必要缺く可からざる羅針盤完備するや否や、説く事を止めよ吾人の幸と不幸とを、學海の怒濤高さ幾百尋要は彼岸に達するに在り、吾人必ずしも羅針盤なきの船舶は航海する事能はずと云はず、然りと雖も羅針盤を整へずして彼岸に達する事を得るは誠に偶然のみ、羅針盤の用は唯だ其航路を誤らしめざるにあり、吾人は書籍目錄に與ふるに學海の羅針盤の名を以てせんとす、

材を伐る者は伐るべし、船を造る者は造るべし、羅針盤を製する者は製すべし、海を航する者は航すべし、吾人何ぞ其の功の多少を論せんや、材を伐る者ありて始めて船舶を造るべく、船舶ありて後海を航すべく、羅針盤ありて以て航路を定むべし、社會の進歩は分業の發達にあり、五十年の春秋豈に能く萬般の事業を負ふ事を得んや、學術工業之を用ゐて榮え、之を捨て、衰ふ、分業の利益今一々説明するの暇なし、請ふ速に本題に入りて書籍目錄の利益那邊に存するかを探り、進んで吾人の求むる書籍目錄は果して如何なるものなるやを述べんとす、

目錄の概要

抑も我國の書籍は遠く漢籍の渡來せし古より、近く今日に至るまで、上下貴賤の著述編纂せしもの其數幾百千萬卷ぞや、汗牛充棟畢竟尋常の言なり、明治廿三年十二月の調査によれば東京圖書館の藏書其數十二萬六千五百十冊ありと稱す、以て少しく一端の消息を知る事を得んか、是の如く極り無き多數の書籍ありとせば、刻苦勉勵夜を日に次ぎ書籍堆裡に埋れて逐次に閱讀するも未だ其の十分の一猶ほ且つ讀む事を得ずして早く此世を辭せざる可からず、何を以てか學說を吐露し書籍を著述するの閑暇あらんや、况んや當今の學問は多く比較を尊み廣く英佛獨露の書を繙き、遠く印度希臘羅馬の文を究めざる可からざるの時なるに於てをや、加之學問の道極めて多端なるを以て遂に分業専門の道開かれ、各其の志す方に従ひて專修するに至りたり、然れども彼の書籍の多き事既に説きしが如く、且つ其書籍文學に屬するものあり科學に屬するものあり、何れを科學の書籍とし何れを文學の書籍とせん、是を知らんと欲せば少くも一度び之を通讀するに非ざるよりは何にして之を分別する事を得ん、若し幸にして其の題目によりて如何なる種類に屬する書籍なるかを認め得可き者有るも、是れ單に其の一部分のみ、今鎌倉大系圖と稱する一書を取り來らんに、誰か能く之を知る事を得ん、或者は之を見て鎌倉時代武將武臣の系譜となすべし、然れども安ぞ知らん是れ爲永太郎兵衛等の著はせる一淨瑠璃本ならんとは、是僅に一例のみ之に類するもの豈少からんや、枕草紙の題目を見て警官書店の主人を詰り、古事記の表題を聞て濫褻を纏ふたる乞食者と誤想する等數ふるも盡くる事非ざる可し、加之彼の書籍には同名のものあり、同

韻名の者あり、兩名の者あり、零本の者あり、落紙の者あり、刊本あり、字本あり、名ありて未だ出でざるものあり、早く亡びて今に傳はるは全く僞書のものあり、一覽するも具眼の士に非ざるよりは之を識別する事真に難中の至難なる可し、僞を真なりと思ひ誤り、未だ出でざるを出でたりと考へ、之を讀み之を求めんとせば勞して功なく、徒らに光陰を費して識者の笑を招き甚しきは後進の徒を誤るに至るべし、故に古史記録によりて少しく取調べんには先づ博覽強記の人につきて參考すべき書籍を尋ねるに非ざれば勞して功すくなしと云ふべし、若し夫れ山村僻邑に在りて尋ねるに其の人なく求むるに其書の乏く、果して何れの書に依るべきかを知るに迷はゞ其の不幸察するに餘りありと云ふべし、譬へ尋ねるに其の人ありと雖ども終始之を尋ねんか、答ふる者も問ふものも遂に其の繁に堪えざらんとす、嗚呼此の患を免るゝを得ば文運の進歩豈に今日之勢に止らんや、然らば乃ち如何にして此の患を除く可き、此の患を除く可き唯一の法は完全なる書籍目錄に若くもの非ざるなり、若し机上二卷の完全なる書籍目錄を得ば幾百千萬卷の書も手に從て其性質直に明らかなる事を得、山村僻邑の人も當に恨み無かるべし、王鳴盛曰く目錄之學學中第一緊要事、必從此問途方能得其門而入、又我が先儒松崎謙堂は門人に必ず先づ藝文志を讀ましめ、泰西の大學にも亦た此學の爲に一科を立つと聞けり、吾人の書籍目錄を目して學海の羅針盤となす豈所以なしとせんや、

書籍目錄とは如何なる者ぞ、諸種の書籍の題目を列記し其性質を知らしめて以て學者を益せんとするもの即ち是なり、

遠く漢籍渡來の昔より我邦に於て著述編纂したる書籍の數は汗牛充棟と云はんもなか／＼愚なる程にて實に世界萬國に於て其比を見ずと云ふも決して過言にはあらざるべしされば萬古の學者が古代の事情を穿鑿せんと欲するには充分の材料を備へたりと云はんか然るにこれらの著者は近代に至りてこそみな書籍に目錄を付し或は大部の物には索引を添ふるものあるに至りたれども古書は多くは寫本隨筆の類にして數十卷の大冊に渉るものも目錄もなく索引は勿論の事なれば卷中の事實は一々讀了せざれば分明に知る事能はず此の煩雜に妨げられて貴重なる古書も徒らに書庫の中に埋没し遂に蠹蟲の餌となり後代に至りては此痕跡たにとゞめざるに至るべしされば古書を保存し穿鑿の便利を與えんとするには古書の目錄及索引の編纂會を設立して古書の中に從來未だ目錄を附せざるものを集めて別に目錄を作りまた索引を編纂して引用に便ならしめん事は實に有益の舉なるべしと或社友は物語られたり(明治廿一年『出版月評』第十六號)

古書之目錄索引の編纂猶且つ益する所多し、况んや一般の書籍目錄に於てをや、明治廿四年十月卅日發兌早稻田文學第二號全書編纂を論して曰く

泰西にてはサイクロピヂア(全書)今は殆ど何事に關しても備はらざるはなきに至りたれば或る一事を取りしらべんとする時は先づサイクロピヂアにつきてはゞその取調の方針を知ることを得、孟浪方向を定めずして雜籍を繕き徒らに光陰を消するが如き損なし、然るに我邦は元來サイクロピヂアやうのもの乏し隨つて『群書一覽』に類したる書籍目錄だにいと

稀なり云云(中略)吾人は彼の經濟雜誌社が『社會事彙』『人名辭書』等を編纂せし如く諸科に關するサイクロピヂアの編纂に従はん事を切望す和漢洋億萬の書籍百千の牛に汗せしむる今、從來の如き方法によりて後進の學者に讀書せしめば未だ三文學の一斑をだに窺はざるに彼等早く既に半死の白頭翁とならん

吾人はサイクロピヂアの必要なる事を知らざるに非ず、然れど今は之を論ずるの必要なし、唯其意見の相似たるを以て此處に掲げしのみ、

書籍目録に付て豫め取調ぶる事能はざるの今日、若し徒らに無益の書を讀みて方に讀むべきの書を讀まず、既に古人の定説あるを知らずして千思萬考心を盡して一小事實を考究し、或は貴重な時間を費して辨難攻撃の愚を演ずる者あらば惜むべきの至にあらざるや、若しそれ書籍目録によりて生ずる其他の利益に至りては請ふ委しく目録の種類を説くの後其條下に附加せん、

目録の沿革及び其の例

彼の支那に於ては劉歆其の父の叙録に據り群書を摠て七畧を著し、班固七畧を基礎として藝文志を編し、其の後鄭默荀勗の中經簿、王儉阮孝緒の七志七錄等書目を編次せしもの儂指に暇あらずと雖も、其の能く完全遺憾なきもの甚得難し但し隨書の經籍志差々其体を得たるものと稱せらる、其の後又た新舊唐書の經籍藝文二志あり、以後官撰には宋の崇文總目、明の文淵書目あり、私書には、晁公武陳振孫鄭樵馬端臨焦竑等の者あり、孰れも一是一非得失參半と云べしとぞ、清乾隆の四庫全書提要に至つては古來書目の集大成にて、其の間臆斷謬説無きにしも非ずと雖ども、援

据洽博鑑別清審、洋々たる大觀なりと、我國に於て圖書目録の濫觴は寛平中に藤原佐世が奉勅所撰の日本國現在書目に發し、天養平治年間に通憲入道藏書目録あり、永正中に至り清原業忠が本朝書籍目録の撰あり之を和書分類書目の鼻祖とす(以上三書は羣書類從中に載せらる我校藏書羣書類從第十八輯雜部にあり)、其後慶長以來文運頓に勃興するに至りては目録の書亦た從て夥し、少しく長に渉るの嫌無きに非ずと雖ども今其の作者書名卷數分類等を左に示さん

○本朝書籍目録 寫本一卷

大内記業忠

俗に御室書籍目録と稱す、卷首には本朝書籍惣目録と記せり、部立は

- 神事 帝紀 公事 政要 格式 氏族 地理 類聚 字韻 詩家 和哥 和漢 管絃
- 醫書 陰陽 人々傳 官位 雜々 雜鈔 假名

○日本書籍考 一卷

林道春

日本記古事記舊事記より、近代の雜記にいたるまで、百廿部の作者卷數并びに其大意を記す
○和板書籍考 十卷五本 元祿十五年三月上木 幸島 宗意

和漢の書籍慶長年中より元祿年中に至るまで本邦にて刊行するもの數百部、をの／＼作者卷數大意を片假名にて記せり、部立は

- 神書 儒書 武書 史傳雜記 醫書 諸子百家 詩文尺牘 和哥和字諸書 字書法帖
- 辨疑書目 三卷 寶永七年上木 中村 富平

片假名を以て注釋す、部立は

- (上) 同韻書目 同名書目 兩名書目 古今書目 畧名書目 讀曲書目
- (中) 植字書目 足利書目 落卷書目 落紙書目 本朝作者書目 有名未出書目
- (下) 名教書目 類書々目 書寫書目

○書籍名數 三卷 天明辛丑上木

中村 治重

此書は和漢書籍の標題數字に係るものを纂め各その名數を記す

- 卷之上 自一部至四部 卷之中 自五部至十部 卷之下 自十一部至百部

○合類書籍目錄大全 十二卷

夢窓國師時代より明和の頃に至るまでの印本を類を分て遍く之を載せ、各卷作者を附す

- 子集 國史 神書 有職書 儒書 經書 諸子
- 丑集 文集 書翰書 詩集 詩話 聯句書
- 寅集 歷史 傳記 故事書 雜書 字書 韻書 印譜
- 卯集 醫書 外科書 鍼灸書
- 辰集 諸宗經 末書類 諸宗折經 僧傳 天台宗書 日蓮宗書
- 巳集 俱舍宗書 律宗書 花嚴宗書 法相宗書 眞言宗書
- 午集 禪宗書 語錄類 植字板語錄類
- 未集 淨土宗書 一向宗書 佛書雜類 假名法語類
- 申集 歌書 物語類 連歌書 俳諧書 狂言書

- 酉集 筆道書 石刻類 往來手本類 女筆手本類
- 戌集 天文 曆占相書類 筆法書 教訓書 女書 躰方書 茶道書 立花書 般上書
- 料理書 雛形書 隨筆書 小說書
- 亥集 地理書 圖類 謠曲糸竹書 舞書 草子類 書譜 兵書 軍書

○群書一覽

例言中に曰く古書の早く亡びて今傳はれるは全く僞書なるもの少からずこれらをのする事はすこぶる無用に屬すと雖ども若し其書を見んに具眼の人にあらざれば其の眞僞を分つ事難かるべければことさらにその體を委しく記し且つ先輩の議論を擧げて蒙士のまどひをどくものなりと部立は

- 卷之一 國史 神書 雜史 卷之二 記錄 有職 氏族 字書 往來 寶帖
- 卷之三 物語 草子 日記 和文 記行 卷之四 撰集 私撰 家集 歌合 百首千首
- 卷之五 類題 和歌雜 撰歌 歌學 詩文 醫書教訓 釋書 管絃
- 卷之六 地理 名所 隨筆 雜書 群書類從

又た同く享和中に近藤守重の御本日記正齋書籍考(一名右文)出でたり、辨訂精核考据確實目錄の最

なりと稱せらる、然れども吾人不幸にして其の書を手にする事能はず、唯其評によりて満足せざる可からず、天保中堤朝風の近代名家著述目錄あり、之れ著述目錄の權輿なり、此外足利學校林崎豐宮崎の藏書目錄楓山淺草兩文庫内閣書目等あり、近者目錄の著述せられしを聞く事稀なり、唯

僅に明治廿六年以來中根肅治の慶長以來諸家著述目錄出でたるのみ、東京圖書館帝國大學の文庫亦た必ず整頓したる目錄あるべしと信ず、

目錄の種類及び其の効用

書籍目錄を分つて三種とす、分類目錄著述目錄年表目錄之れなり、分類目錄は書籍の種類により部門を分け書籍の表題を其下に列記せるもの、本朝書籍目錄以下群書一覽右文故事等之に屬す、著述目錄とは著者を經として題目を緯となせるもの、近代名家著述目錄及び慶長以來諸家著述目錄等之に屬す、年表目錄は年代により題目を分ちしものなり、此の種類は未だ我國にある事を聞かず、而して此三類中最必要なるを分類目錄とす、然れども我國に於ける分類書目は既に前章に示せしが如く甚だ亂雜にして未だ整然一定せし物あらず、彼の生物學に於て分類學の發見せられし以來、綱目屬種を立て、相類似せるものを集め、大に其學の發達を促せしに非ずや、分業專門に攻究せらる可きは亂雜的に非ずして秩序的なるを尊む書籍分類學豈に徒然に附して可ならんや

上田萬年氏著國語のため日本大辭書編纂に就て(明治廿二年二月東洋學會演說)の内、語の集合法に於て文語の集合法を説て曰く

文に屬するもの、上に於ては大項目によりて書籍を分類し、この分類法は一の學問にして既に一の大事業となり居り各國書籍館員の頗る配慮する所なり、その分類したる書籍を著者の年代にて類別しこれによりてこの語は何年頃にかゝる躰形にてかゝる書籍に見えたり

と考證して示すべきなり

又た島田博士明治廿六年二月十五日發兌史學雜誌第三十九號に於て、目錄の書と史學との關係に於て目錄の史學に於ける効用を述べ、且つ曰く

保元平治以後元龜天正に至るまで數度の大亂を經て和漢の古籍も大抵散亡に歸したれども名祠巨刹故家舊族中秘本を藏するもの猶往々之有り、皇倪義疏群書治要及び佚存叢書等の如き之を海外に傳へて外人我國文明の盛なるを歎稱せり而して書籍の厄は古今の通患、牛弘の述ぶる所李易安の記する所何れの時か有る事無らん、况んや當今世局一變故家名族漸く衰頽に赴き子孫其舊物を保存する事能はず、輾轉售賣或は海外人の手に落るもの其幾何なるを知らず、惜むべきの甚しきならずや、但其史傳に關するものは近來百方採集して往々柱史に登りたれども此外猶滄海の遺珠も多かるべし若其中尤も貴重なる書は謄寫して副本を作り他日不虞の變に備へは聖世の盛舉藝苑の美事と云へし、左れども費途浩繁遽かに行はれ難くんは目錄の書を作り、附するに解題を以てして其梗概を存すべし、不幸にして本書或は散逸するも猶名數の存するあり、以て其概畧を觀るに足らん此今日に在て闕くべからざる要務なり

目錄の効用猶ほ之れに止らざるべし、然れども先づ此に筆を止めん、

目錄編纂に關する吾人の意見

羅針盤正しからざれば航路を謬るの恐れあり、書籍目錄の編纂誠に慎まざる可けんや、然らば乃

ち如何にして可なるか、之れ最も重要な問題なり、之に對して吾人少しく考ふる所無きにしても非ず、請ふ之を述べん原來書籍目録は書籍の性質を知らしむるを望むを以て、解題の必要な事何ぞ反復説明するを要せんや、常識あるもの誰か之を知らざらん、吾人は今單に人名辭書に於て列傳の必要なに等しと云ふの外更に多辯を要せざる可しと信ず、而して其体裁は果して如何すべき、之れ目録運命の關する所にして輕々に看過すべき問題に非ず、抑も分類書目は書目中尤も必要なものにして、一事實を取調べんとするに當り閱讀すべき書籍を知るに於て、缺く可からざる者なり、然れども或一書の題目を見て、其の性質を知らんとするに當りては、一々逐次に題目を通覽するに非れば、到底知る事を得ざるなり、著述目録年表目録に至りては、其の不便實に分類書目に勝るものあり、吾人の取るべき目録は是れ等の不便を避けざる可からず、此に於て吾人の欲するもの唯僅に一法あるのみ、即ち字書の態にならひ五十音排列の書籍目録を作り一々附するに解題を以てし、之に因て書籍の性質著者の姓名著作の年代種類を審ならしめ、別に附録として分類著述年表の三目録を附加せしめ、且つ其の分類目録をして各種の著書を作作者の年代によりて排列せしめば、庶幾くは尤も完全に近き書籍目録を得んか、然れども是れ實に一大事業にして能く數人の爲すべきに非ず、人々己れの專攻する學科に於て各々書籍目録を作り、而る後集めて大成するに非ざれば即ち不可なり、嗚呼我國に於て目録の學を修めし人誠に稀なり、僅かに田中稻城氏一人嘗て歐米に渡り親しく視察せしと雖ども、今や東京圖書館長となり其説を吐露して、斯學を起さんとするの意なきもの、如し、何ぞ其の聞ゆる事の少きや、吾人もとより薄學非才、

加ふるに淺見寡聞能く思ふ所を盡すを得ずと雖ども、斯學の爲に密かに嘆ずる所あり、遂に貴重なる紙面を汚がすの止むを得ざるに至りたり、請ふ之を免せ、

旅 の 記

葛 の 屋

なにしてもよろしければかけよ、よしかゝむ、と編輯の君だちに約したる言の葉は今更らに消さむやうはなけれども、さらはとて恙ありて二十日近うも籠り居る身は、たいさへ物うきものを筆とりて何をか書き得む。已むなくて文筐の底かきさぐるに去年の秋、那谷、篠原のあたりへものしつる旅の記出てたり。時は今、霜既に降りて四方山のけしき錦の雲棚びくをりから、坐ろ先きの日の事とも思ひ忍ばれてなむ。遂に責塞き草とはなしつ、文中事の去年に屬るものあるはこれか爲めなり、讀まむ人其心してよ。

霜月初二日、朝旅立つ家をいづれば霧深うこめたり、

とく起きて旅にし出れば霧こめて垣のあなたに白菊の見ゆ

模糊たるうちに菊の花白う見えゆかしき心地しぬ、犀川の大橋につけは丁眼子すでにあり、おもしろき旅立ちの初めとて心も勇み氣もすゝめは、天氣の昨日に似ず晴れたるを喜び、行く先きのことかにかくと語り合ふうち常にはいと長き野町の町續きも過ぎて、やがて青松一帯路迷はぬ野々市街道にかゝりぬ。丁眼子の服装いかにと見るに、頭には七つも八時も過ぎたる黒き帽を戴き羽織の下に革囊をかけあしを脚絆草鞋にかため、手に蝙蝠傘を携へたり。おのれか帽は茶色にて

色褪めたるさま古物展覽には丁眼子に劣らぬ賞をや得べき、なほ背に菅笠とゴザとあり肩には革囊をかけぬ。

笠に吳蓆足も輕けや秋の旅

田の面のながめ一様にてさまざまも思はねど、こゝかしこ遙かなる森のかけに三つ四つ二つ藁屋の見ゆる畫に描けるか如し、田の中に古びたる鳥居一つ立てり、祠はかなたの森の内にやあらむ。蜻蛉飛びぬ

赤とんぼ落葉を逐ふて飛んでけり

丁眼子左天を望みあなよきかなと云ふ、何事と見れば白山雪を戴きて白うたてるなり。今まで氣付かざりしおぞましきよ。

那谷紅葉わが見に來れば彼方なる白山白く雪は降り鳥

思ひきや梢の秋をめんとて進む我身の雪を見むとは

九時半松任を過ぎて十一時半手取川に着きぬ、手取川の景何ぞ雄偉なるや、目さむるとは之れをや云ふならむ。一碧大空、白砂、青山、白山、流水、長橋、豆大の人、舟、遠樹、遠村、寂莫、寧ろ長閑、濶大無邊、勇壯、爽快、崇高、是れ目に見、心に感ずる所、白山の嶽神と手取川の河神と葛の屋の詩美神とは頓に一心合躰して我身の我身なるを知らず、あゝと云ひて坐することも打ち忘れをうちに、丁眼子は早くも橋しものよき處に蹠きて矢立とり出て紙をのべて描き初めつ。おのれもなか譲らむとおなじく筆を潤したれども、日頃習はぬ業とて思ふに任せず、さて

は腰折れにてもとうちあんするに景に臨て良句なし、

遠かすみかゝれる山の山の上に雪を戴き白山の見ゆ

筆を投けてもてるにぎり飯に腹ふくらせ、名残りを歸路に止めて一時いで立つ。二時半小松の町を過く、水の面家のわきより見ゆる村につく、岸に至れば漁夫網の目をつくるへり。此水はど問ふ、今江瀉と應へぬ、風吹かねども漣漪よせて水草そよぎ、舟繋かねども岸にありて流るゝ恐れなし。何れも棹の短かきは底の淺き爲めにしもあらざめれど、砂原に鱗多く混れるは魚の夥き爲めならむ。

なみの皺よせてはかへす今江瀉古き江とこそ云ふべかりけれ

今江瀉とは何れの頃の今江ならむ、聞まほしうこそ。今江と木葉とをつらぬる川の橋をもすぎやかて左に折れ小山の坂路をたどる、山路ははじめてなり。此のあたり道普請す、ふと雁の聲を聴く、仰けば

聲を帆にあげてくる雁空の海に見るほどもなく影ぞ消えぬる

名は知らねども藪林のいたく茂れる村を過く、柿の多くなりたれば里人に柿賣る家なきかど問ふに、粟津まで行かねはあらむと云ひて暫しうちかたぶき、おぬしらほしきやと問ひ返しぬ。さなりと云へはよしやらむと云ふに、うれしくて其のしりへに従ひ家のわきにいたる、柿の實あやしきまで實れるを指して此れよけむ、上枝のうまきをこそと折りて七つ與へぬ。價を問へは二錢もらふと云ふ、言葉も姿もすべて素朴なるに田舎人のなさけ何處もおなじきに感しぬや云ひ

て去る。暫し進むうちにも互ひに信は田舎にこそと語り合ふ。丁眼子先づ一をかむ、咄澁柿！一聲の終らぬうち見事柿をは地になげつたり。次きておのれも試むるにあなむく澁ければをかしくて

澁柿を甘い顔して鄙心

丁眼子も笑ひて云ふ、聞く其かみ義經等山伏となりて此わたりを通れるとき、里の小供の遊へるを見て、辨慶は關所を通らで過ぎむ間道はなきかあらは教へよよきものどらせむと云ひけるに、小供つくくくと見て、をぢの其扇子を與へよさらは告げむと云ふまゝに、携へし鐵扇を與へけるを小供は受くるや否つと走せ行きて遠き彼方より大聲にて、おろかなる人よ他に間道ありなむには誰か安宅に關所を構ふべき、と云ひて笑ひけるとか。昔にもかゝるためしを菊川ならぬ柿の失敗と云ひて皆柿を捨てつ、田舎人どてあながちに信ある人のみにはあらざりけり。黄昏粟津の温泉場につく、入り口の巡查駐在所に訪ひて親切にて、廉くて、旨きもの澤山食する宿は何方ぞと問ふ、法師は第一、坂田、紙屋は第二、其他あまたあれどもよからずと云へり。さて進むに小學校あり、軒の正面によこ額をかく、開智館齊泰書と讀まれぬ。遂に法師に宿る、五時過ぎなり、導かれて二階に登れば中庭を隔て、彼方の二隔に物の音ならし歌唱ふ聲いと喧しくて堪へ難し、安からず覺えて室を見廻すに鳳凰樓の三文字扁額に書かれぬ。おのれら一目見て先きの不平何處へ消へ失せけむ、新たなるうれしさ胸に充ち躍りぬ、聞かすや、我征清十軍のますらをども昨日今日戈とり揃へ火筒さげ激しき戦さにうち勝ちて明日の佳節を鳳凰城頭にこそほぎまつらむと云

ふなるを。あはれ奇しき哉、おのれらの鳳凰樓に宿れること。あはれ快き哉、おのれらの鳳凰樓に宿れること。

夕かけて唐の都を陥れ朝に君か千歳をぞ祝ふ

さはれこは温泉場の樓上なり、絃歌の聲を凱歌の聲と聞きたりとして何かせむ。恨むおのれ唐國に渡りて諸士と其勞を共にせざるを、

思ひやる心は常に魁けて戰の庭のしるべこそすれ

湯に入る、湯つぼ深く立てども肩を越せり、温泉傍より絶へず涌き出づ。晚餐をくひ日記をしるし終れば爲すへき事もなくはや床をのべさせむとするに、をうな一葉の名刺もてき此人々を知らすやと云ふ。取りて見れば思ひきやならで少し心當りの精軒子、探水子、田研子、三人の名を記せり、おのれは階下の三子を訪ひ地圖を見、話を聞き明日あさての道すぢ、尋ねべき古跡とも聞くを得ぬ。笑ひなせぞ、おのれら二人は唯那谷あるを知りて其他を知らざりしなり。さては此たびの旅づと半は三子の賜物と云ふへきか。九時半ねぬ、今日の道のり十里あまり。

三日、六時におく、朝日影うるはしうさして天氣昨日にも勝れり、恐らく天津御神も今日の佳節をこそほぎまつりての故ならむ。おのれら恭しくわが 大君の御世を千代に萬代と祝ひ奉りわが國のますく盛ならむことを祈る、仰きて鳳凰樓の三字を見れば今更らのやうに覺えて感慨たどへなし、朝のしたく濟ませて勘定書を召せし二人様御飯料等いろくメ四十三錢と記せり。僅か四十三錢なりされども懐さびしきおのれらは思はずオー、デアアと叫ひ、其代は拂へともまた

お茶代に及はず。をうな六ヶ敷顔して待てど更に出すへうもあらされは去る、暫しありてをどめ受取がきもてき御菓子代八錢給はるへしと云ふ。これにて妙味は玄に達しぬ御菓子代の催促聞くからにをかしようなむ、

唐國の都に似たる宿なればものゝ價も高くぞありける

かきすつる旅路の耻をひろひ置きて笑はむ人を笑はせむせむ

三子より一足先きに出て立つ、式臺に至れば主婦、主母飛ひ來りて喃々御世辭を云ふこと商買だけにいと巧みなり。草鞋をしむる間に堪へたる可笑しさ鬨を跨かぬうち唇を漏れぬ、笑ひのうち町を過ぎ谷間の道となれば朝の山景色はわきて靜にして鏝かたけ歩む賤の男を見ねは知らぬ鳥の囀る聲も聞かす、太古の世まことこの如きものなりけむ、人の命のなかきもことわりならし大むかしゆかしと思ふ人しあらは山に遊ひて知りぬむかしを

路のかたへに石ふみ立てり、二十四とせの文月の頃、このあたりの道を墾きたる人々の爲め建てしものなり。前田利鸞題に云ふ

路之通否、其政可視、周道如砥、詩人所美、巉巖平矣、勝區章矣、潤色政理、吁嗟諸氏、

どわづか一里の道のりなればこともなく那谷村につきぬ。

聞き及び暮ひをりにし那谷に着きたれば早く那谷寺のけしきを愛てむと集ひ遊へる男のこどもに問へば、此處なり此處を進めば觀音に至らむと云ふ、觀音とはと思ひつゝ小さき石橋を渡り礮敷きたる道を進む。此道遠く續きて松の樹兩側に並ひ立ちほの暗くほらあなかはた谷間にて入る

如き心地す、礮を踏みて第一步右手に石立てり、一首を刻む

この娑婆は電光朝露と聞上は彌陀頼まるゝ人ぞ目出度

數十歩左手に那谷寺あり、數百歩右手にあやしき大石そばだち其上に塔立てり、左手の小高き處に小池あり蓮荷枯れ破れ水も溜まり流れす淋しう物かなしきさまなり。今一步進むれば唯見る大巖おどろくしくたち聳ゆ、高さ幾十丈と云はましこゝかしこ大なる竅あり、奥深きは中暗く淺きは石地蔵二つ三つあるは四つ五つすえたり。目のあたり一つらにおなじ大石のつゞき合へるあまりに勇ましくおごそかなれば何にたどへむ言の葉も知らず、おのか身の俄かにちいさやかになりたるやう覺えしこそをかしけれ。呆れに呆れ左の隅に進めば右手に池水清く澄み、立て石の上に毘沙門天戟とりていかめしくつい立ちをこのしれものやくと睨み給ふ。左手に口そそぎ手洗ふ泉あり。其あたり大石を其儘削りて段となし道二つあり、一つは大なる穴に、一つは小さき祠に導きぬ。石たてり

戻る氣は暮ても付す花の中

更 隣

前を見れば石の段つきつきにつゞき兩側に石燈籠立ち並ひ木陰に半かくれて寺らしき建てもの見ゆ、勇み走せ登ればさきに男の童の云へる觀音をまつれる御堂なりけり。岩によせかけて床下の柱長くたくましく建てたるさま京清水の名高き舞臺に似通ひたり、那谷の景こゝぞ第一處と見たる僻目ならじ。堂に登る闕内の大さ二間に二間半、楣の彫りものにかな網かけたり左甚五郎の作と云ふ、詩歌の額あまたかゝれり、觀音祠に題して自生山とかきまたの額に施無畏(河三治書)

どかけり、此祠に向ひて堂の右手に大岩を切り貫きてどんねるを作れり、くゝりて彼方に出づれば見るべきものなし、さればとて山に登る木繁りて世の常の山のごと奇しき事なし。降りて堂より猶左手に登れば大なるあなに至りぬ、内に地藏五つたり六人坐し給ふ、また降りて此邊の景色を寫すうち三子着きぬ。石文をかれこれかきうつす、池の畔、楓に蔽はれて立すまゐよき石に

笠しくや花のむかひの権の本

時喜雨

路のよきほどにも大なる楓に紅く染められ稍苦むして玉華翁の碑あり、其文

玉華翁既逝矣翁之魂其何從招乎不之乎空冥窳廓之上而其必游揚乎那谷雲煙之際矣甚矣翁之愛那谷也花晨月夕杖屨嘯咏欣然樂而忘歸者年如一日也翁加賀大聖寺人近邑有那谷寺寔爲 寬平法皇留錫之地跡古境靈堂宇宏麗爲一方名區而恠嚴攢秀松翠如雲春花秋楓絢然與丹矐相映四時之美挹之無盡翁之樂而忘歸者固宜矣翁性超脫不受塵絆如冥鴻孤翮以吟哦揮瀉自娛尤妙於丹青雲煙渲染徃々以那谷爲摸本真機之所發津然不能自己也遊翁之門者建碑於那谷以表焉嗚呼翁之於物嗒然忘懷而獨不能忘於那谷翁之魂其恍惚歸來乎若見其霞裾褰袂若聆其嚶然而嘯則欣然而樂者亦猶生之日也此舉也非特不朽翁之名翁之精爽亦尙永弗堙滅矣哉翁瓜生氏名英字芳卿號玉華通稱榮庵爲藩之醫員云

天保癸巳正月平安摩島長弘撰加賀

東方潛書

丹羽璞建

玉華翁、玉華翁、あのれはじめて知りぬこの清雅の高士を、あはれこは天保のむかし、今もこの如き人ありやなしや。

學ひの友二たり昨夜山代に泊れりときぬ、一夜二夜の旅なれども旅路に友に遇ふはいどうれしきものなりかし。敷碓よりますぐの道を登れば三重の塔あり、釋迦の像を安坐す扉にはいづれも獅子と牡丹とを彫り、この處地せまくまた大石も見えず興いどうすし、紅葉踏み分け後ろへの山に攀つればこも木繁りて世の常の山のごと奇しき事なし。下りて左手の道を進む、れいの翁の石ぶみ立てり、

石山の石より白し秋の風

はせを

ほかになほ二つ

譽たれははや雪散や那谷の石

木 雄

美しきけしきや雪の晴れあかり

青 坡

三つとも大石の上にもなげに立てたり、あのづからに似てなつかしなど云はず人もありぬべけれどあのれが目にはなかくことさらめきてくちをし、石しろもむげによそほひよくてあかぬ心地す。鳥居をくれば若宮八幡宮の社あり、新たなる建ても此のあたりにはにげなしとや云ふべき、其そとはただけにて遠くつゞけり。鳥居の前をすぎて石階を登れば堂一つあり。こゝの扉にも獅子と牡丹とを彫り、獅子の形一間毎にさまかはりてあもしろければあのれらまむきのを寫すうちに三子去る、その後また遇はす。此の處も趣きなしうしろの山に登ればこも木繁りて世の常の山のごと奇しき事なし。時をはかれれば十一時も過ぎぬあはれながめはつきじいでやく寺に行く暇に一目と跡戻り

見るほどのことありとも見えねば寺には詣ですうしろかみ引かれつゝいそぎ去る。

さて那谷の景はいかに、聞きしに勝れりや劣れりやと問ふものあらば、おのれはまされりと答へむ、誰やらむおのれに那谷は石山の景をまねて作れるなりと云ひき、あらず。石山の景とはまたくさまかはれり、また誰やらむおのれに那谷には水ありと云ひき、あらず。水ありとはなま／＼の言なり、山は水ありてをかしく水も山ありてゆかし、さは云へ山にも水にもほどこそあれ、おほきやかなる山にさゝやかなる水、はた大きやかなる水にさゝやかなる山はなか／＼恨みのたねぞかし。げに那谷には水なきにあらむされど此景にはたらぬ心地するにあらずや、石山のけしき那谷のけしき石のさまのをかしき何れをよしと定め難くや、さはれ石山は山なり那谷は谷なり、石山の石は堅けれどもこれより小さく、那谷の石は軟かなれどもかれよりも大いなり、小さくて堅ければ人手の細工少なく、大きくて軟かなれば人手の細工多し。石山をのみ知る人は那谷を思はむこと難く、那谷をのみ知る人は石山を思はむこと難しおのれは水の今一きは多かれと望むと共に、此けしきのかれに似ざるをいとうれしう喜ぶもの、うべなく石山の石より白し秋の風に散る紅葉ばはいづこにもありなむ、時ならなくに雪散りて暮れても戻るを忘る花の中は、あはれ那谷のけしきかも。

(つゞく)

燈 下 餘 錄

春 日 光 千 代

○後趙の石勒云はずや大丈夫の心事は正に磊々落落たるべしと然り男兒の本領は實にこれに存す

言はんと欲して趁起し語らんと欲して逡巡し獨り心緒を惛亂せしめて漫に他を怨む卑の極醜の極笑ふに堪へたり憫むに堪へたり

○一杯の土壤を譲らざるの泰山巍然として雲表に聳へ細流を撰ばざるの河海は澎湃滔々たり人須らく宇宙を呑むの量を有せざるべからず些事に拘泥し小事に齷齪して寛容の徳に乏しき者は終世碌々として成すなく空しく一片の白骨となり了りて悔ひず識者の嗤を受けざらんと欲するも得んや

○人生過去に於けるの追想は縹渺として幽懷多きものなり、しかも吾人青年は徒らに過去の思想に戀々として死兒の齡を數ふる老婦の醜を學ぶべからず進歩は青年の命と知らずや進め進め進歩の氣風に駕して天下に翱翔せよ

○閑居して不善をなすを小人といふ今や面に公明を銜ひて偽善に巧なる者を以て文明人士と呼ぶ暗夜權門に趨りて哀を乞ふとも白日輕車に駕してシガーを燻せば紳士才物たるを妨げず便なる哉
○世人曰く朱に交れば赤くなるも眞に是れ自ら卑しとするの情を洩らせるものなり吾人は朱に交りて赤くなるが如きの人物を多とせず其朱を奪ふの紫的人物を望む人に化せらるゝが如きは偉人傑士にあらず人を化するの者誠に始めて偉人たり傑士たるなり

○自ら信ずる事厚きものは人に致されず自から信ずるの薄きものは人に致され易し而して己れの致されたるを悲まずして致したるの人を怨む妄も亦甚だしといふべし而も是れ世一般と思へば實に長大息の至りに堪へず歎又歎

○古人は片言隻語猶且つ其責任を重んず今の人士は滔々たる快辯數萬言を累ねてしかも其責任を問はるゝに至れば顧みて他を謂ひ宛然關せざるを才ありとす孰れか果して可なる我は前者に與せんかな

○文章は感應觀察考思三方の總合に成るしかも中自から禁ずる能はざる所のありて始めて咳唾皆文章を成すべきなり頭を傾け筆を擲りて苦吟沈黙強て無より有を取らんとす宜なる哉窘澁の文字多きや然りと雖も猶沈吟の勞を嘗むるに於て稍取るなきにあらざ只猥に他を品し漫に人を評して罵詈得意たるが如きは最も賤むべきの輩たり而してこの般の輩今日文壇に多しとせば豈に慨すべきにあらざや

○情を矯むるの人は聖哲と呼ばれ情に従ふ者は凡といひ庸と稱せらる怪むべきは情なるかな

○人多くは社會道德の頽破を嘆ずしかも單に末流の混濁を責めて源の既に已に濁れるを省せず百年黃河の清むを待つと何ぞ撰ばん難ひ哉風紀振肅の問題や

○千古絶へざる芙蓉峰の白雪を心とし百世盡きざる大瀛の蒼渺を量とし散るを惜まぬ山櫻の觀念を以て銳利鐵を斷つの寶刀の如く萬物を處理せば盤根錯節何ぞ憂ふるに足らんや蜻蜒洲は渾圓球に大飛躍すべきなり今日かゝる人ありや否や

○桃李華咲けば下自ら徑をなす才學德行あらば求めざるも人争ふて之に歸し名聲隆々として起らん好むで名を賣り強て譽を求めんとする曹の如きは其心術の陋寧ろ憫むべきなりしかも今世かゝる輩に富む是れ賀すべきの現象か

○驟手作雲覆手雨、紛々輕薄何須數、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土、と絶叫せしは盛唐の詩人杜甫にあらざや嗟々天下今日の事實に謂ふに忍びざるなり巧言令色以て他の肺肝を探り陰柔便佞ひそかに之を陷擠して自得たり友誼の衰廢亦甚しき哉

○シーザルの語に曰く徐ろに急げと嗚呼徐ろに急げ！語相反するが如きも萬事成功の秘訣は實にこの數語に包まる記すべし誦すべし

○「辭達而已矣」吾人が文筆を執る亦この觀念を有すべし陋劣なる思想を包むに綺語雅辭を以てす表に錦繡を衣て裏に襤褸を纏ふが如し以て愚者を瞞すべし以て識者を欺くべからず滔々たる天下徒らに章を雕り句を琢くを以て文章の能事を盡せりとなす者多し憂ふべきかな

○緘黙必ずしも可ならず愚人にして黙す賢といふべく賢者にして黙す愚といはざるべからずテオラスロウーズの言味ふべし

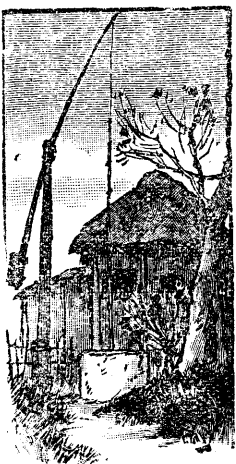
○長舌畢竟何の用かあるスバルタ人がサモスの大使を嗤りし語に曰く始を忘れたり忘れたるを以て終を解せずと前節と照して興味轉た深し

○誹譏何ぞ意とするに足らむアリストテレスが我が在らざるの地ならば劍以て刺さるゝも敢て不可なしといへりし者其量の濶大胸中の綽々たる歛すべし尊ぶべし片言單語の我を毀る者ある時は勃然として怒る今世人士何ぞ局促たるや

○頃日雜書を繙く中に曰へるあり或人徂徠の尊大を挫かん爲に孔子が佛、老、の前に平伏せるの圖を以てし讚を乞ふ徂徠直ちに筆を執りて曰く老子談虛釋迦說空孔子伏笑と好漢々々この慨あるを

以てよく一世の大儒たるを得たりしなり戦々兢々として人言を恐れ自ら處るの卑きもの何ぞ徂徠の爲に倣はざるや噫

(完)



雜 報

意氣昂る

本月十五日大々の廣告は控所に掲出せらる同窓の意氣昂ると萬丈知らず何が故か請ふ暫らく怪しむをやめて其廣告文を視よ曰く

秋風蒼旻を拂ひ金氣人を侵す方に是れ講武の

好時節にあらずや即ち例年の例に倣ひ將に

天長節の嘉辰を期して一大運動會を催さむと

す親愛なる校友諸君よ請ふ奮つて來り會し個

々の妙技を揮ひて以て萬丈の氣焰を揚げよ

と實に是れ吾人が翹首鶴頸待ちに待ちたる陸上

大運動會の消息にあらずや爾來同窓の意氣大に

昂り各級委員は東西に奔走して餘興評定に日雜

れ足らざるが如く露濃かなる小立の芝生は曉霧

未だ霽れざるの時既に修練の健兒に富み晚籟徐

ろに吹きて星光依稀たるの時靜勝館前壯丁準備の影黒し數椀の粥飯飢を忍びて胃腸を養ふの士は自ら禁烟の徒となりて呼吸の長きを期せるの丈夫と相失笑し可憐可笑無邪氣の態寧ろ愛すべし彼等が積日の蘊蓄は正に龍鬪虎撃の壯觀となりて顯はるべし其詳細なる狀況は請ふ之を次號の誌上に報道せん

肉躍り腕鳴る

側かに聞く秋季の行軍は大運動會につぎて舉行せらるべしと今や天高く馬肥えたり真に三軍叱咤武を用ふべきの時况んや意氣昂れるの機に乗じて兵を北越の山野に闕し餘勇勃々たる壯漢をして奮ふ所あらしむ東籬の菊花咲ふて我を送り連山の錦楓歎んで我を迎へん快絶愉絶思ふてこゝに至れば覺へず肉躍り腕鳴る

二兇大に暴威を逞くす

我が凱旋の將士を襲ひ我が南征の貔貅を犯し四

方に暴威を逞くせし赤痢虎疫の二兇は今や秋風吹きて淑氣澄めるにも拘はらず袂を聯ねて吾が金城の下に大舉し來り其瀾漫する所遂に本縣師範校の堅壘強壁を衝破して紅顏多恨の青年を奪ひ去り其猛威當るべからず遂に百萬城下の各學校をして休學の止むを得ざるに至らしむまかも我校の如きは校長閣下を始めとして職員諸君が懇篤周到なる注意と各自衛生を嚴守せしとによりて幸に這般の憂なく日々に登校勤學の務に服するを得豈に賀せざるべけんや豈に祝せざるべけんやまかも油斷大敵寸時も心を許すべからず昨又校長閣下は特に學生を一堂に集めて懇々たる注意を與へられぬ其衷心吾人を思ふの情深き感涙轉た慘々たるを覺えざるなり吾人猶一層の戒心なくして已むべけんや去れ二兇速かに逝きて吾人をして憂慮せしむるなかれ

天何ぞ無情なるさきに同學の數氏を失ひて悲哀の涙未だ乾かざるに今又阪下康君遠逝の報に接す痛惜又痛惜嗚呼玉碎蘭摧の歎何ぞまかく繁きや人生恨事多し而も將來有望の資を抱きて空しく一片の白骨となる底の恨事に比すべきあらんや雲黯澹として山川愁ひ風凄颯として艸木悲む嗚呼哀哉

各會合の狀況

忽ちにして烈火忽ちにして凍氷一盛一衰起又倒、諸會合の狀況亦憫むべきなり偉大なる希望を有して率先奮起せし元、法二會は如何余輩は其消息の洩すべきものを有せず當年のシセロ、デモツセニス何くにかある何ぞ聞として聞ふるなきや元、法一會亦單に其存立して消滅せずとの語をきいて満足せざるを得ず文二の文友會未だ何等の氣焔を吐きしやを知らず歌文會は本學

年に入りて既に二回の集合を催せりまかも四十有餘の會員僅かに七八名の出席に過ぎざるは盛況といふを得ざるべし只稍人意を強くするに足るは文三年の茶話會と新たに興りし法一の演說會のみ前者は老成の君子の如く沈着質實に歩武をすゝめて會員の舌端筆尖に上りし説話、聞くべく視るべきの者多し後者は新鋭の勢に富み活氣満々として前途有望なるが如し希くは蝴蝶と共に短命ならざらん事を、要するに各會合の現況は萎靡衰頹僅かに奄々たる餘命を繋ぐに過ぎざるが如し振起一番光焔萬々丈たれ猶洩れたる所は後號に報告するを怠らざる可し

評議員改撰

九月三十日を以て評議員の改撰を行ふ結果左の如し

- | | | | |
|------|------|-------|-------|
| 同 | 二年 | 朝長勘十郎 | 春秋原在文 |
| 同 | 一年 | 古澤鍵次郎 | 貫一 |
| 同 | (二部) | 栗本 | 田鶴濱次吉 |
| 同 | (三部) | 柳田 | 中村 光吉 |
| 同 | (三部) | 友麿 | 中屋 重業 |
| 同 | (三部) | 宮川重太郎 | |
| 豫備一級 | | 森部 孝郎 | 稻垣文次郎 |
| | | 白石 久夫 | |

過雁數行

○評議員會 本月十四日評議員會をひらき豫算案を議決せり
 ○武道稽古 日割は今回左の如く規定せらる劍道は月、水、土、柔術は火、木、土、弓術は月、水、金

○漕艇の技 熱心なる健兒は放課後二里の長堤を勞とせず松風に嘯きて大野の修練場にオールを握りて意氣旺盛今や其技に熟せるの士少から

ズと聞く可賀々々

○寄贈雜誌 東西南北の詞兄筆硯益多祥每號その寄贈を辱くし麗藻を拜するを得厚謝々々因に云ふ吾人は新に明治義會より遷喬なる雜誌を、石川縣尋常師範學校より刮磨會雜誌の寄送に接す皆備へて書庫室にあり

前號に豫告せし如く端艇會理事は其成立の史を寄す即ち特に之を本欄に收めて發起者諸氏の經營辛苦を同窓諸君に紹介す

編輯委員識

端艇會成立につきて

曩に編輯子理事に強ゆるに端艇會成立の顛末を以てす理事も武骨木強の男兒長權を操りて小艇を激浪怒濤の間に運用するの術に於ては敢て人後に落ちざるを期すと雖も管城子を驅りて紙上に錦繡を織るの技に至りては等しく是れ一双の鐵腕まかも運用意の如くならざるに苦しむよりて固辭すると再三編輯子頑として可かず已むなく禿筆を弄して僅かに其責を塞ぐと云爾

端艇會理事謹識

りまかも未だ表面的運動を試みるの機到らざるなり偶春期休業に際し同窓の諸子は三々兩々相携へて或は加能の勝地を跋渉し或は三越の遺跡を歴訪するの時計らずも能州七尾に於て端艇造作の技に巧なるの工師あるを聞き欣然拊舞斯業を創起せんとの思考を腦裏にたぐみて歸校せし者を誰とかする即ち中大路正雄佐治修三及び飛石久太郎の三氏とす然れども三氏の企つる所は僅々數十名の同意者を得て單に一小艇を浮べ聊か胸懷を遣らんとするに過ぎず未だ今日の如き全校一致の盛大なる會合を作るの希望を有せざりしなり彼等は狹隘なる下宿樓上茶を飲み菓を喫して悶を拂ひ鬱を感むるの間徐々に同好者を求めつゝありき時に東都共立校に於て斯道のチヤムピオンたりし近藤他家雄氏來り談ずるの際其企計を耳にし大に之を賛し猶進で廣く全校の有志に賛同を求むべきを以てす是に於て彼の三

凡そ百般の事業多くは是れ一轉瞬機微の際に起る千思萬考腦涸れ意届して茫然又昏然たるの時忽ち妙案奇想天を衝きて生じ前に惱める所さきの苦しめる所驕然手に唾して解破するを得我が端艇會の成立亦這般の消息に洩れず北陸由來健強剛武の士に富み我校夙に躰育に銳意して擊劍柔道其他諸般の設計悉く備具せり惜ひ哉漕艇の計畫に至りては杳として聞ゆるなく遙かに一高の健兒が名聲を東都に振ひ三高の壯士が鴉海の霸たるを耳にして怒濤澎湃たる北濱、細波揚汨たる蓮湖の好個修練場をして僅かに漁人の蹂躪跋扈に終らしむ遺憾何ぞ止まん痛恨何ぞ禁せんまかも其事業の容易ならざる未だ奮然起て衝に當るの人なかりき客夏慘澹たる悲風神樂丘に吹て壬辰子が愛兒袂を連ねて我が歡迎の客となり東都諸校の英俊又相率めて金城の地を踏むや隱約の中端艇會を設立せんとするの氣運は磅礴せ

氏も大に喜び議成りて之を校長閣下并に職員諸君に謀て其大賛成を得、機到り時會して恰も翼下風生じて冲天に舞ふの勢あり編輯子が所謂三間餘の長檄文は遂に本年四月廿三日を以て控所に掲出せられぬ同窓皆歡呼争ふて其舉に與し甚月ならずして二百に餘るの會員を有するに至れり發起者諸氏の喜悅雀躍如何ばかりぞまかも基礎は堅くせざる可らず根底の張らざる樹木は枝葉の繁茂せざるを思は、豈に是を以て満足すべけんや是に於てか更に設計を擴張して廣く地方に名望ある人士の補助を求めんとするに至れり嗚呼年光一瞬も止まる事なく逝き去りて奔箭の如く茲に我等が大厄たる學年試業は來れり同窓諸氏は孜孜屹々夜もて日につき狀元の榮を荷ふに汲々たり而して發起者は其重任を完くして同窓の知に報ひざるべからず啞暗の聲喃々たるの夜時習察の醫員室には燈光照り渡りて時ならぬ

黒影數四蠢々たり實に是れ發起者諸氏が熱心事業の全備を望むの情切なるよりして他を顧るに暇あらず一刻萬金の光陰を費して事に茲に従へるなり既にして學年試業は終れり樂しく待設けたる夏期休暇は來れり同窓諸氏は先を争ひ前を競て或は久潤の情を怙恃の膝下に陳して靄々たる家庭の薰風に吹かれ或は青山白水意に任せ情に従ひて逍遙す然り而して發起者諸氏は如何彼等亦慈親を故郷に省せんと欲するの心情豈に敢て他に譲らんや山高く水清きの境に清遊を試みるの念慮豈に敢て人に遜らんや唯彼等は事業完成の重責を負へり若し忽諸に附して顧みざらんか彼等は同窓諸氏に對するの面目なきなり是に於て彼等は樂むべきの樂を樂まざるべきの快を享ずして或る者は七尾に奔りて端艇製作の工事を監し或者は熱天地を顧みずして再三再四地方諸豪の寄附を遊説せり精氣の徹する所金鐵も亦薄水の如し工事駁々として日に進み寄附の金員又續々として至る七旬に餘るの休暇は了れり四散の同窓は踵を接して歸り來りぬ端艇二隻は其工を竣り回航委員の手によりて九月廿日を以て愛すべき慕ふべき双影を蓮湖波穩かなるの所に浮べぬ虚誇を避けて質實なる發會式は行はれぬ校長閣下を始め會するもの數十名觀者堵の如し爾來我校健兒が臥龍の嵐に嘯きて從容操れる端艇は快然波を蹴りて宛然疾風の如く甞に北陸人士の目を驚かすのみならず河海の神また茫然として其會て目撃せざりし妙奇に嗟嘆せずんばあらず而して殘餘一隻も亦本月廿三日を以て彼が伴侶の間に繋がれぬ今後修練に艇の不足を訴ふるが如きとなかるべし嗚呼端艇は浮べり端艇會は成立せり是れもとより校長閣下并に職員諸君の斡旋贊助宜しきを得たと海國的氣風の磅礴せしに乗じたると且は同窓諸氏が熱心なる同

情の致す所といへども抑も亦發起者たりし中大路、佐治、飛石及び近藤の四君が辛苦經營の結果

時習寮片信

(寮生某投)

に製艇監督の務を補助せられし鈴木小一の諸君に其勞を謝し併せて之を會員諸氏に報告す

と謂はざるべからず余輩は其功勞を謝すると共に又是に報ふるの情油然而して起らずんばあらず是に報ふるの方法果して如何即ち會員諸氏が

○起て玻璃窓を排せよ、校庭秋色まことに闌なり、菊は咲きそめぬ、葛は薄紅葉せり。

銳意斯道の發達を期して奮勵身力を致すにあり余輩は之を望むと切又切なり是れ武骨木強なる余輩が厚顔にも生來得意ならざる操觚の務に服せし所以とす諸君は本會の既往を思ひ現在を視て豈に一層奮勵努力せずして可ならんや由來創業の難きは守成の難きに如かず守成の任に膺れる吾人の務亦重しといふべし吁事の起るや咄嗟

○六旬の閉鎖は舊生の半を送り、更に岩崎舍務掛の君と三十の新入生とを迎へ得たる外、些の變革をも與へざりき、現在人員七十、既に滿員と稱す、豈狹からずや、

の間にあるといへども之を成すに至りては只熱心に須つのみ熱心！熱心！我れ汝を愛す汝は萬事成功の礎なればなり終りに臨みて理事は寄附金徵集に盡力せられし谷野格氏趣意書起艸其他

○小春日の温かさ、出で、運動場に箇々の得技を争ふ者、去て山に水に半日の跋涉を試る者、天下は寮生の飛躍に任せられたり、

金徵集に盡力せられし谷野格氏趣意書起艸其他百般の記録事務擔當の中村孝、築山直彦二氏并

○秋高く健談の好時節とはなれり、而も賄方の爺公會て寮生をして便々たる大腹を鼓て時習寮太平を謳歌せしむる底の風流を知らず、呵々、○今學年最初の茶話會は例年の例を以て遠行に更へ、九月二十八日、郊外大乘寺山に開く、松

林稍疎なる處、昊天のテント、青艸の毛氈、師は弟と膝を接し新は舊と手を握り、涯なき敬愛の情は一杯の村酒三椀のメツタ汁以外に充溢せるを見たり、誰かいふ今日師弟の情紙の如く又麻の如しと。當日來賓校長閣下今井秋山諸先生等。

(十月廿三日締切)

○賄方に一書生あり、好で讀み好で誇る、史を論じ社會を論じ人を論じ、自ら得意にして人多くは笑ふ、人あり戯に問ふて曰、君宜しく未來の國會議員たるべし、如何、先生頭を掉て曰、否々他に大なる目的在て存す、と、果して然る乎果して然る乎、其志眞に憐むべし。

嗚呼々々

編輯略ぼ了らんとするの際悲むべき一片の揭示出づ曰く本校附近に於て虎疫蔓延の勢あるにつき豫防の爲本月三十一日まで授業を停止すと嗚呼惡むべきの虎疫は遂にこの悲運を同窓の頭に



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は徳義に背くものは一切掲載致さるべし

明治二十八年十一月十五日印刷
 全 年十一月廿一日發行

編輯兼發行者

印刷者

發行所

印刷所

中 川 忠 順
 金澤市五十八町十一番地
 中 村 孝
 金澤市廣坂通第四高等學校時習寮

第四高等學校北辰會

株式會社 英 秀 舍
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

(明治廿八年二月廿七日内務省許可)